

兵庫県芦屋市

月若遺跡発掘調査報告書

第83地点

—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査VI—

2007

芦屋市
芦屋市教育委員会

兵庫県芦屋市

月若遺跡発掘調査報告書

第 83 地点

—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査VI—

2007

芦 屋 市

芦屋市教育委員会

序

六甲山にその源を発して流れ落ちる芦屋川が、その流れを緩やかに変える辺り、月若町から西芦屋町周辺に今回の調査を行った月若遺跡があります。芦屋市は市域に多くの遺跡の存在が知られ、旧石器時代から現在まで、人々の足跡をたどることができます。これは古来、文学の世界でもその風光明媚が語られてきたことと併せても明らかなように、自然の条件が生活に適していたと言えるでしょう。

本書は、平成12年度から始まりました都市計画道路山手幹線の工事に先立つ、埋蔵文化財発掘調査の平成17年度の調査記録を報告するものです。

発掘調査は神戸市に委託して行っておりますが、今回の調査でも貴重な文化財の発見があり、その成果が、当地域の歴史を知る一助となれば幸いです。現地での発掘調査から本書の刊行に至るまで、関係各位及び御協力いただきました多くの方々に心より感謝申し上げます。

平成19年3月31日

芦屋市教育長 藤原 周三

例 言

1. 本書は芦屋市西芦屋町5番-20で実施した、埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都市計画道路山手幹線街路事業に伴うもので、神戸市が芦屋市との間に委託に関する協定書を締結して実施したものである。

発掘調査にあたっては芦屋市教育委員会を調査主体とし、神戸市教育委員会を調査機関とした。現地調査に関しては、財団法人神戸市体育協会が神戸市から委託を受けて実施した。発掘調査組織については、本文（第1章第1節3）に記した。

発掘調査は平成17年5月30日～平成17年11月10日までの間実施した。

発掘調査面積は630㎡である。
3. 調査の遺構図等は調査担当者ならびに調査補助員 王 元林・平山裕之が作成した。
4. 遺物写真は独立行政法人奈良文化財研究所 牛嶋 茂氏の指導を得て、杉本和樹氏が撮影した。縄文土器と石鏃については神戸市教育委員会文化財課 丸山 潔が撮影した。
5. 遺物の実測は神戸市教育委員会文化財課 山本雅和・調査担当者と調査補助員 平山裕之が行い、鉄製品については整理補助員 藤井珠美が行った。
6. 本書で使用した方位・座標は平面直角座標系第Ⅴ系（日本測地系）である。標高は、東京湾平均海水準（T. P.）で表示している。また、図中で使用した方位は、座標北を示している。
7. 本書に掲載した遺跡分布図には、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「西宮」を使用した。
8. 発掘調査に伴う遺構・遺物の図面、写真および出土遺物は、報告書刊行後芦屋市教育委員会に移管する。
9. 現地調査は、兵庫県教育委員会ならびに芦屋市教育委員会の指導・助言を得て実施した。また、芦屋市建設部街路課の協力を得た。
10. 本書の作成は神戸市教育委員会文化財課 安田 滋・山本雅和の指導の下、調査担当者が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 発掘調査の経過	3
(3) 発掘調査組織	3
第2節 遺跡の立地と歴史的環境	5
(1) 遺跡の地理的環境	5
(2) 歴史的環境	5
第2章 発掘調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
(1) 調査の方法	9
(2) 基本層序	9
第2節 第4遺構面の遺構と遺物	11
(1) 土坑	11
(2) 河道	11
(3) 縄文時代の遺物	11
第3節 第3遺構面の遺構	15
(1) 土坑	15
(2) 溝	15
第4節 第2遺構面の遺構と遺物	17
(1) 竪穴住居	17
(2) 土坑	18
(3) 溝	19
第5節 第1遺構面の遺構と遺物	43
(1) 掘立柱建物	43
(2) 土坑	47
(3) 溝	49
(4) ビット	49
(5) 遺構に伴わない遺物	51
(6) 鉄製品	52
第3章 まとめ	53

挿 図 目 次

fig. 1	関連調査地点位置図	2	fig. 27	SD203出土遺物 (10)	38
fig. 2	調査地の位置	5	fig. 28	SD203出土遺物 (11)	39
fig. 3	周辺の遺跡	6	fig. 29	SD203出土遺物 (12)	40
fig. 4	調査区南壁土層断面図	10	fig. 30	SD204土層断面図	41
fig. 5	縄文土器	11	fig. 31	SD204出土遺物	41
fig. 6	第4遺構面平面図	12	fig. 32	第1遺構面平面図	42
fig. 7	石簾	13	fig. 33	SB101平面・断面図	43
fig. 8	第3遺構面平面図	14	fig. 34	SB101 - SP1001出土遺物	43
fig. 9	第2遺構面平面図	16	fig. 35	SB102 - SP1218出土遺物	44
fig. 10	SB201平面・断面図	17	fig. 36	SB102平面・断面図	44
fig. 11	SB201出土遺物	18	fig. 37	SB103平面・断面図	45
fig. 12	SD201出土遺物	19	fig. 38	SB104出土遺物	46
fig. 13	SD202平面・断面・立面図	20	fig. 39	SB104平面・断面図	46
fig. 14	SD202出土遺物 (1)	21	fig. 40	SK101平面・断面図	47
fig. 15	SD202出土遺物 (2)	22	fig. 41	SK101出土遺物	47
fig. 16	SD203土層断面図	23	fig. 42	SK105平面・断面図	48
fig. 17	SD203平面・立面図	24	fig. 43	SK106平面・断面図	48
fig. 18	SD203出土遺物 (1)	26	fig. 44	SK106出土遺物	48
fig. 19	SD203出土遺物 (2)	27	fig. 45	SD101断面図	49
fig. 20	SD203出土遺物 (3)	28	fig. 46	SD101出土遺物	49
fig. 21	SD203出土遺物 (4)	29	fig. 47	SP1087平面・立面図	49
fig. 22	SD203出土遺物 (5)	30	fig. 48	ピット出土遺物	49
fig. 23	SD203出土遺物 (6)	32	fig. 49	ピット・遺物包含層出土瓦	50
fig. 24	SD203出土遺物 (7)	34	fig. 50	遺物包含層出土遺物	51
fig. 25	SD203出土遺物 (8)	35	fig. 51	鉄製品	52
fig. 26	SD203出土遺物 (9)	36			

表 目 次

表 1	石簾法量表	13	表 4	第1遺構面土坑法量表	48
表 2	第3遺構面土坑法量表	15	表 5	鉄製品法量表	52
表 3	第2遺構面土坑法量表	18			

挿図写真目次

挿図写真1 作業風景	1	挿図写真5 現地説明会(3)	9
挿図写真2 平板測量	3	挿図写真6 SD301(東から)	15
挿図写真3 現地説明会(1)	8	挿図写真7 SB103 - SP1213	45
挿図写真4 現地説明会(2)	8	挿図写真8 整理作業	54

カラー写真図版目次

カラー写真図版1 S D 203 出土遺物	カラー写真図版3 S B 201・S D 203(西南から)
カラー写真図版2 第2遺構面全景(東南から)	カラー写真図版4 S D 202 出土遺物
S B 201(西南から)	S D 203(北東から)

写真図版目次

写真図版1 第4遺構面(東半部)全景(西から)	写真図版11 S D 203遺物出土状況(南から)
S R 401(北から)	S D 203遺物出土状況(北西から)
写真図版2 第3遺構面全景(東南から)	写真図版12 S D 203遺物出土状況(1)
第3遺構面全景(西から)	S D 203遺物出土状況(2)
写真図版3 第2遺構面全景(北東から)	写真図版13 S D 203遺物出土状況(3)
写真図版4 第2遺構面全景(東南から)	S D 203土層断面(上層)(南から)
第2遺構面全景(西から)	写真図版14 第1遺構面全景(東南から)
写真図版5 第2遺構面全景(西南から)	第1遺構面全景(北西から)
第2遺構面全景(西から)	写真図版15 第1遺構面クレーン撮影(北西から)
写真図版6 第2遺構面クレーン撮影(西から)	第1遺構面クレーン撮影(西から)
第2遺構面クレーン撮影(西南から)	写真図版16 S B 101(西から)
写真図版7 第2遺構面(北東部)全景(西南から)	S K 101(南から)
S B 201(西南から)	写真図版17 S K 105炭化物出土状況(東から)
写真図版8 S K 202(南から)	S P 1038(南から)
S K 203(南から)	S P 1087(西南から)
S K 204(東から)	写真図版18 S P 1219(北から)
写真図版9 S D 202(北東から)	南壁土層断面
S D 202土層断面(南から)	東壁土層断面
写真図版10 S D 202遺物出土状況	写真図版19 縄文土器
S D 202遺物出土状況	石炭
S D 202遺物出土状況	S B 201出土遺物

写真図版20 S D201出土遺物
S D202出土遺物 (1)
写真図版21 S D202出土遺物 (2)
写真図版22 S D202出土遺物 (3)
写真図版23 S D203出土遺物 (1)
写真図版24 S D203出土遺物 (2)
写真図版25 S D203出土遺物 (3)
写真図版26 S D203出土遺物 (4)
写真図版27 S D203出土遺物 (5)
写真図版28 S D203出土遺物 (6)
写真図版29 S D203出土遺物 (7)
写真図版30 S D203出土遺物 (8)
写真図版31 S D203出土遺物 (9)
写真図版32 S D203出土遺物 (10)
写真図版33 S D203出土遺物 (11)
写真図版34 S D203出土遺物 (12)
写真図版35 S D203出土遺物 (13)
写真図版36 S D203出土遺物 (14)
写真図版37 S D203出土遺物 (15)
写真図版38 S D203出土遺物 (16)

写真図版39 S D203出土遺物 (17)
写真図版40 S D203出土遺物 (18)
写真図版41 S D203出土遺物 (19)
写真図版42 S D203出土遺物 (20)
写真図版43 S D203出土遺物 (21)
写真図版44 S D203出土遺物 (22)
写真図版45 S D203出土遺物 (23)
写真図版46 S D203出土遺物 (24)
S D204出土遺物
写真図版47 S B101出土遺物
S B104出土遺物
S K101出土遺物
S D101出土遺物
S K106出土遺物
ビット出土遺物 (1)
写真図版48 ビット出土遺物 (2)
第1遺構面出土瓦
写真図版49 第1遺構面遺物包含層出土遺物
写真図版50 鉄製品
同上X線写真

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

都市計画道路山手幹線街路事業は、兵庫県の尼崎市から神戸市を結び、阪神間の4市を東西に貫く全長約30kmの幹線道路として計画されたもので、そのうち芦屋市翠ヶ丘町から三条南町に至る2.3kmの区間が芦屋市域にあたる。この事業は、平成7年1月17日に発生した兵庫県南部地震によって、国道2号線・阪神高速道路などの主要交通路が麻痺状態となり避難・救助・救援物資の輸送に大きな支障をきたしたことに起因している。そのため、災害時の交通路の確保の必要性が重視され、震災復興事業の1つとして位置づけられた。そして早急な整備が進められることとなったのである。

芦屋市域の山手幹線街路事業はJ R芦屋駅前など、一部区間はすでに完了していたが、そのほとんどの区間においては未着手のままであった。さらに、未着手区間の約半分には月若遺跡や寺田遺跡などの周知の埋蔵文化財包蔵地が存在していた。平成9年度の芦屋市教育委員会によって行われた試掘調査では、埋蔵文化財の確認された地域は広範囲に及ぶことが明らかになっている。

芦屋市教育委員会では、山手幹線街路事業以外にも民間開発や復興関連事業に伴う調査が多数控えており、現状では山手幹線街路事業に対応できる体制が整っていなかった。そこで芦屋市および芦屋市教育委員会は、山手幹線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の取り扱いについて兵庫県教育委員会と協議し、神戸市に埋蔵文化財発掘調査の支援を要請することとなったのである。

神戸市では山手幹線街路事業の重要性や状況を鑑み、平成12年度に兵庫県教育委員会を立会人として、山手幹線街路事業を対象に「埋蔵文化財の発掘調査業務に関する協定書」を神戸市・芦屋市・芦屋市教育委員会の間で締結した。同年、その協定書に基づき神戸市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。そして、調査開始後6年次目にあたる平成17年度は月若遺跡第83地点の発掘調査を実施した。



押図写真1 作業風景

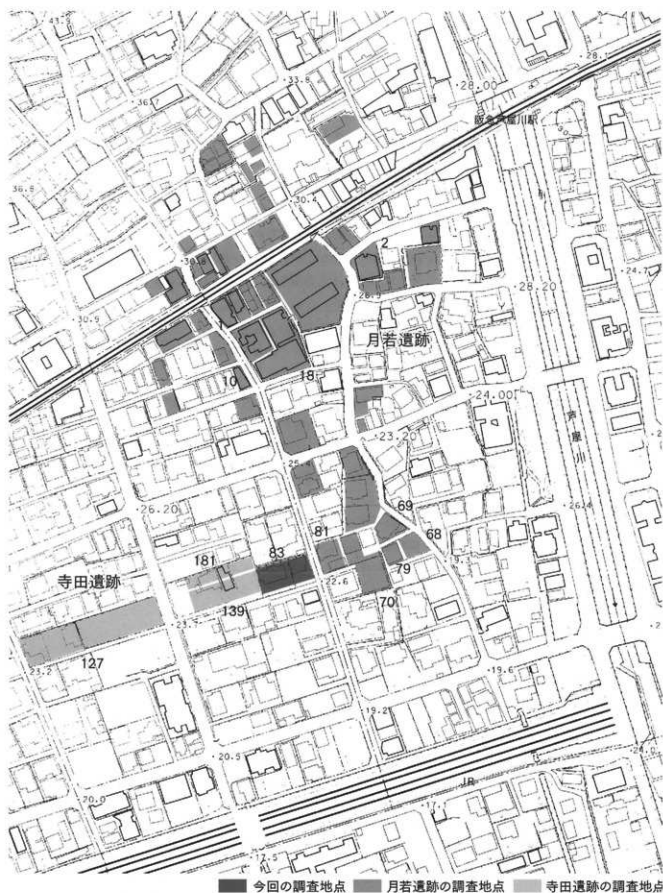


fig. 1 関連調査地点位置図 (S=1:2,500)

(2) 発掘調査の経過

第83地点

月若遺跡第83地点の調査は、5月30日から調査区に防塵シートなどの仮囲いを設置して開始した。6月3日には調査区の東側から重機掘削を開始する。同時に第1遺構面遺物包含層の人力掘削を開始した。調査区の東半部においては遺物の出土が顕著である。

第1遺構面では古墳時代後期、飛鳥・奈良時代、平安時代から中世までの遺構が見つかった。おびただしい数の柱穴や掘立柱建物数棟を検出し、7月8日には空中写真撮影・全景写真撮影を実施した。翌日からは柱穴の断ち割り作業に並行して図化等の記録作業を行った。

記録の終了部分からは順次、第2遺構面に向けて遺物包含層の掘削を開始した。7月26日台風7号接近・通過。8月上旬には第2遺構面の遺構掘削を進める。竪穴住居や溝などを検出。溝からは弥生時代後期の土器が大量に姿を現す。8月24日、芦屋市教育委員会が、昨年度の月若遺跡第81地点と寺田遺跡第181地点の調査で、芦屋廃寺の創建期の軒瓦が出土した成果と併せて現地で記者発表を行う。8月27日、芦屋市教育委員会主催の現地説明会を開催した。見学者70名。8月29日より酷暑の中、溝から出土した大量の遺物の図化と取り上げ作業を行う。9月6日、台風14号接近・通過。降雨で調査区が水没。9月27日、第2遺構面全景写真撮影。9月29日、2回目の空中写真撮影実施。秋風が吹き始める。

10月3日、第3遺構面に向けて掘削開始。溝や土坑を検出する。遺物の出土は少ない。弥生時代中期頃の遺構面と考えられる。10月14日、全景写真撮影および平面測量実施。

10月20日、第4遺構面の河道掘削。10月25日、全景写真撮影、平面測量実施。

10月27日より調査区の埋め戻しを開始する。11月2日、埋め戻し終了。防塵シートなどの撤収。11月10日、調査資材の撤出などを行い、調査を終了する。

整理作業

出土遺物の整理は神戸市埋蔵文化財センターで実施した。平成17・18年度で水洗作業、ネーミング作業、復元作業、金属器の保存処理、遺物実測、遺物写真撮影、製図、原稿作成などを実施し、報告書を刊行する。

(3) 発掘調査組織

発掘調査は、これまでと同様に、芦屋市から神戸市が受託し、財団法人神戸市体育協会が神戸市から委託されて現地調査を実施した。発掘調査組織は下記のとおりである。



擇図写真2 平板測量

平成 17 年度

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当

檀上 重光 前神戸女子短期大学教授
工楽 善通 大阪府立狭山池博物館館長
和田 晴吾 立命館大学文学部教授

芦屋市教育委員会

教育長 藤原 周三
社会教育部長 高嶋 修
生涯学習課長 石濱 正昭
生涯学習課長補佐 中戸 博幸
主査(学芸員) 森岡 秀人
係員 春木 和子
係員(学芸員) 竹村 忠洋
嘱託(学芸員) 坂田 典彦
嘱託(学芸員) 白谷 朋世

神戸市教育委員会

教育長 小川 雄三
社会教育部長 高橋英比古
教育委員会参事 桑原 泰豊
(文化財課長事務取扱)
社会教育部主幹 渡辺 伸行
(埋蔵文化財指導係長事務取扱)
社会教育部主幹 丸山 潔
(埋蔵文化財センター所長事務取扱)
埋蔵文化財調査係長 丹治 康明
文化財課主査 安田 滋
文化財課主査(兼務) 菅本 宏明
事務担当学芸員 東 喜代秀

財団法人神戸市体育協会

会長 家治川 豊
副会長 矢野栄一郎
(専務理事事務取扱)
常務理事 野浪 建作
総務課長 横関 勇
総務課主査 菅本 宏明
調査担当学芸員 斎木 巖

平成 18 年度

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当

檀上 重光 前神戸女子短期大学教授
工楽 善通 大阪府立狭山池博物館館長
和田 晴吾 立命館大学文学部教授

芦屋市教育委員会

教育長 藤原 周三
社会教育部長 松本 博
生涯学習課長 川崎 正年
生涯学習課長補佐 長谷川易司
主査(学芸員) 森岡 秀人
係員 春木 和子
係員(学芸員) 竹村 忠洋
嘱託(学芸員) 坂田 典彦
嘱託(学芸員) 白谷 朋世

神戸市教育委員会

教育長 小川 雄三
社会教育部長 大谷 幸正
教育委員会参事 柏木 一孝
(文化財課長事務取扱)
社会教育部主幹 丸山 潔
(埋蔵文化財指導係長事務取扱)
社会教育部主幹 渡辺 伸行
(埋蔵文化財センター所長事務取扱)
埋蔵文化財調査係長 丹治 康明
文化財課主査 安田 滋
文化財課主査(兼務) 山本 雅和
事務担当学芸員 前田 佳久
阿部 敏生
保存科学担当学芸員 中村 大介

財団法人神戸市体育協会

会長 家治川 豊
副会長 水田 裕次
(専務理事事務取扱)
常務理事 碩 弘四郎
総務課長 横関 勇
総務課主査 山本 雅和
整理担当学芸員 斎木 巖

第2節 遺跡の立地と歴史的環境

(1) 遺跡の地理的環境

芦屋市は兵庫県南東部に位置し、東西約2.5km、南北約8.3kmの南北に長い市域を有する。面積は17.31 km²で、東側は西宮市、西側は神戸市と接し、南側に大阪湾を臨む。

月若遺跡は芦屋市でも西部に位置する芦屋市月若町、西芦屋町を中心に広がり、阪急神戸線と南側のJR東海道線に挟まれた閑静な住宅地に所在する。

地形的には芦屋市の北側には六甲山地、南側には大阪湾が広がり、六甲山地から大阪湾に流入する中小河川がもたらした土砂堆積によって形成された狭少な臨海平野部が形成されている。月若遺跡はそんな中小河川のひとつである芦屋川の右岸域の標高25～32mの傾斜地形の変換部に位置する複合遺跡である。芦屋川によって形成された「芦屋川扇状地」の東半部に存在している。遺跡は東西約250m、南北約350m、総面積約58,000 m²の範囲に広がるものと推定されている。

(2) 歴史的環境

旧石器時代 旧石器時代では丘陵上に立地する朝日ヶ丘・打出小槌・岩ヶ平等の遺跡で国府型ナイフ形石器が出土している。しかしながら、遺構は確認されていない。

縄文時代 縄文時代では早期の山芦屋遺跡で高山寺式の押型文土器や石器が出土している。前期には山芦屋遺跡が継続して営まれ、朝日ヶ丘遺跡や業平遺跡でも土器が出土している。月若遺跡では早期末から前期初頭の土坑が検出されている。中期末から後期には山芦屋遺跡で

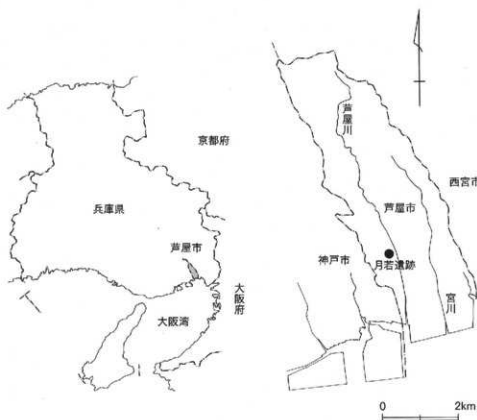


fig. 2 調査地の位置



- | | | | |
|-------------|--------------|-------------|-------------|
| 1. 月若遺跡 | 12. 打出岸造り遺跡 | 23. 冠遺跡 | 34. 森南町遺跡 |
| 2. 寺田遺跡 | 13. 大原遺跡 | 24. 西山町遺跡 | 35. 本庄町遺跡 |
| 3. 粟平遺跡 | 14. 船戸遺跡 | 25. 芦屋鹿寺遺跡 | 36. 東山遺跡 |
| 4. 堂ノ上遺跡 | 15. 八十塚古墳群 | 26. 三条九ノ坪遺跡 | 37. 森銅鐸出土地 |
| 5. 堂ノ上銅鐸出土地 | 16. 朝日ヶ丘遺跡 | 27. 三条岡山遺跡 | 38. 生駒銅鐸出土地 |
| 6. 阿保親王塚古墳 | 17. 藤ヶ谷遺跡 | 28. 津知遺跡 | 39. 保久良神社遺跡 |
| 7. 金津山古墳 | 18. 城山遺跡 | 29. 清水町遺跡 | 40. 本山遺跡 |
| 8. 打出小槌古墳 | 19. 鹿尾城跡 | 30. 六条遺跡 | 41. 本山銅鐸出土地 |
| 9. 打出小槌遺跡 | 20. 城山・三条古墳群 | 31. 前田遺跡 | 42. 北青木遺跡 |
| 10. 若宮古墳 | 21. 山芦屋遺跡 | 32. 深江北町遺跡 | |
| 11. 久保古墳 | 22. 会下山遺跡 | 33. 森北町遺跡 | |

fig. 3 周辺の遺跡 (S = 1 : 25,000)

弥生時代

竪穴住居が見つかった。後期に入ると遺跡は増加し、森南町遺跡では土器が、本庄町遺跡では貯蔵穴群が検出されている。寺田遺跡でも土器が出土しており、晩期の遺構・遺物も見ついている。その他の晩期の遺跡では、六条遺跡・本山遺跡・森北町遺跡・北青木遺跡などで土器が出土しており、若宮遺跡では遺構に伴って灰帯文土器が出土している。

弥生時代では、近畿地方最古段階の土器と木製品を出土した本山遺跡が成立し、後期まで継続して営まれる。前期中頃には北青木遺跡が成立し、前期後半には若宮遺跡・寺田遺跡・葉平遺跡など遺跡の数が増加する。中期に入ると、前半では若宮遺跡で竪穴住居が、寺田遺跡で土坑が検出されている。後半では会下山遺跡・城山遺跡・東山遺跡が高地性集落として知られ、後期初頭まで続いている。後期になると、月若遺跡・芦屋庵寺遺跡・打出小槌遺跡などで集落が営まれ、後期後半には遺跡の数が一層増加する。月若遺跡では竪穴住居を始め、多くの遺構や遺物が出土している。他に三条岡山遺跡・三条九ノ坪遺跡・冠遺跡などが知られる。

またこの地域では多くの銅鐸が出土しており、堂ノ上銅鐸・生駒銅鐸・本山銅鐸・森銅鐸などが知られる。森北町遺跡では前漢鏡が出土している。

古墳時代

古墳時代前期には、弥生時代終末から継続して営まれる遺跡が多い。月若遺跡では前期の竪穴住居が見つかった。また、中期後半以降には滑石製模造品を中心とする祭祀遺物が多く出土し、遺跡のひとつの性格を特徴づけるものとなっている。三条岡山遺跡でも祭祀遺構が見つかった。寺田遺跡では前期の竪穴住居が検出され、中期以降には各地点で多くの遺構・遺物が見つかり、鍛冶がもつ住居が見つかった。後期には造り付けのカマドを持つ竪穴住居や掘立柱建物なども見つかった。葉平遺跡でも後期には竪穴住居や土坑などの遺構が検出されている。

古墳では翠ヶ岡古墳群と呼称されている前期・中期古墳群が成立する。その中には三角緑神獣鏡を出土した前期の円墳である阿保親王塚古墳、中期後半では帆立貝形古墳の金津山古墳、中期末の前方後円墳である打出小槌古墳が築造されている。後期から終末期には横穴式石室を持つ八十塚古墳群や城山・三条古墳群が知られる。

奈良時代～

平安時代

白鳳期創建とされる芦屋庵寺では、金堂の基壇が発見され、大量の瓦が出土している。近年の発掘調査の成果からその様相が明らかになりつつある。寺田遺跡では奈良時代の掘立柱建物などの遺構が検出されているが、平安時代になると遺構の分布は減少傾向にある。津知遺跡では大型掘立柱建物とともに、墨書土器や円面硯などが見つかった。深江北町遺跡では、「驛」と墨書された土器などが見つかった。葦屋驛家の関連遺跡であることが推測されている。

鎌倉時代以後

中世以降には月若遺跡・寺田遺跡・芦屋庵寺遺跡・津知遺跡・六条遺跡などで掘立柱建物などの遺構・遺物が多く検出されている。

【参考文献】

村川行弘・石野博信『会下山遺跡』芦屋市教育委員会 1964

芦屋市役所『新修芦屋市史 本編』1976

南博史編『寺田遺跡発掘調査報告書』財団法人古代学協会 1985

森岡秀人 他『芦屋庵寺K地点・寺田遺跡第16地点発掘調査概要報告書』芦屋市教育委員会 1989

森岡秀人・白谷朋世 他『芦屋庵寺遺跡ほか発掘調査概要報告書 月若遺跡第12地点・月若遺跡第14地点』
芦屋市教育委員会 1992

浅岡俊夫・古川久雄 他『芦屋市月若遺跡 第10地点・第13地点』六甲山麓遺跡調査会 1993

森岡秀人・木南77子『芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書』芦屋市教育委員会 1996

森岡秀人・竹村忠洋『寺田遺跡第40地点発掘調査実績報告書』芦屋市教育委員会 1997

渡辺昇編『三条岡山遺跡 第11地点発掘調査概要』芦屋市教育委員会 1998

森岡秀人・竹村忠洋 他『芦屋庵寺遺跡 第53地点・寺田遺跡 第104地点・震災復興埋蔵文化財確認調査概要報告書』芦屋市教育委員会 1999

重藤藤行・竹村忠洋編『寺田遺跡第95地点発掘調査概要報告書』芦屋市教育委員会 1999

森岡秀人・竹村忠洋編『若宮遺跡(第1・2地点)発掘調査報告書』芦屋市教育委員会 1999

森岡秀人・木南77子『芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 月若遺跡(第19地点)』芦屋市教育委員会 1999

山田清朝・服部寛『寺田遺跡(第117～124地点)発掘調査概要報告書』芦屋市教育委員会 2001

森岡秀人・坂田典彦 他『六条遺跡発掘調査報告書』芦屋市教育委員会 2002

前田佳久・平田朋子・中居さやか『寺田遺跡発掘調査報告書 第127・130・132・133地点』芦屋市教育委員会 2002

前田佳久 他『寺田遺跡発掘調査報告書 第132・133・137・139・141・142地点』芦屋市教育委員会 2003

前田佳久・石島三和 他『月若遺跡発掘調査報告書 第68・69・70地点』芦屋市教育委員会 2004

竹村忠洋・白谷朋代『月若遺跡(第71地点)発掘調査報告書』芦屋市教育委員会 2004

川上厚志・阿部功『寺田遺跡発掘調査報告書 第150～153・157～160・166～168地点』芦屋市教育委員会 2005

安田道・山口英正・阿部功・中村大介『栗平遺跡 第61地点 月若遺跡 第79・81地点 寺田遺跡 第178・181地点 発掘調査報告書』芦屋市教育委員会 2006



挿図写真3 現地説明会(1)



挿図写真4 現地説明会(2)

第2章 発掘調査の成果

第1節 調査の概要

(1) 調査の方法

調査区は、芦屋川右岸の扇状地上に立地し、平成13年度に調査を行った寺田遺跡第139地点の東側に隣接している。遺跡分布図では月若遺跡と寺田遺跡の境界にあたる。掘削土の仮置き場を西側の発掘調査終了部に確保し調査を進めた。調査区は東西約37m、南北約17mで、調査面積は約630㎡である。4面の遺構面を確認することができた。

盛土・攪乱土層および旧耕土・床土層を重機によって掘削した後、人力による遺物包含層の掘削、遺構の精査・検出を行った。そして遺構面ごとに図面の作成・写真撮影などの記録作業を行った。空中写真撮影については第1遺構面・第2遺構面のみにについて行っている。

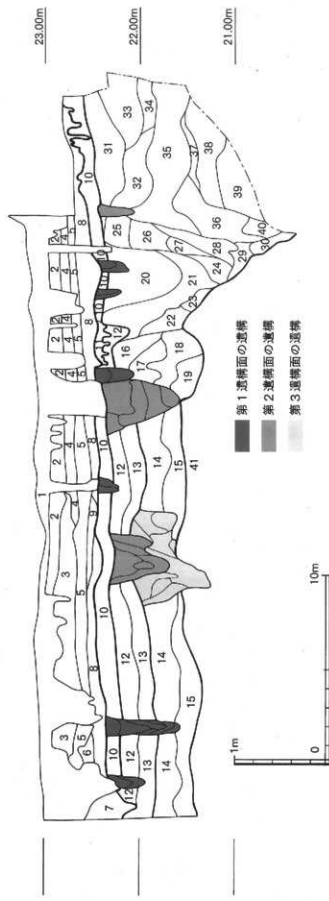
(2) 基本層序

基本層序は、現地表面から下に、盛土層・灰褐色極細砂～粗砂層（近現代耕作土）・暗灰褐色極細砂層・淡橙褐色極細砂層となり、第1遺構面の遺物包含層である淡茶褐色極細砂～粗砂層がある。調査区の東半部でより多くの遺物が含まれている。そして、茶褐色極細砂層（細礫混）が第1遺構面の基盤層であり、第2遺構面の遺物包含層でもある。東半部の遺物包含層は、マンガンを多く含み非常に硬くしまっていた。この下層が暗茶褐色極細砂層（細礫混）で第2遺構面の基盤層となる。その下層には、黒褐色砂質シルト～粗砂層（細礫混）があり、淡黒色砂質シルト～粗砂層（細礫混）の第3遺構面となる。さらに、暗黄茶褐色砂質シルト～粗砂層（細礫～中礫混）の間層をはさみ、黒褐色砂質シルト～粗砂層（しまり良）の第4遺構面となる。

調査区西端部は河道の影響による堆積があり、基盤層は東から西に向けて高さを増している。



押図写真5 現地説明会(3)



- | | | |
|--------------------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1. 攪乱・礫土 | 29. 淡黄灰色極細砂 | 39. 黄褐色極細砂 |
| 2. 灰褐色極細砂 | 30. 暗灰褐色極細砂 小・中礫混 | 40. 暗灰褐色極細砂～極粗砂 |
| 3. 灰褐色極細砂 | 31. 暗灰褐色極細砂～粗砂 | 41. 黒褐色砂質シルト～細砂(しまり良) |
| 4. 暗灰褐色極細砂 | 32. 淡黄褐色極細砂～極粗砂 | |
| 5. 淡黄褐色極細砂 細礫混 | 33. 黄褐色極細砂 | |
| 6. 灰褐色極細砂 粗砂 細礫混 | 34. 灰白色砂質シルト～極細砂 | |
| 7. 灰白色極細砂 小・中礫混 | 35. 淡茶灰色極細砂～粗砂 | |
| 8. 淡茶褐色極細砂～粗砂 細礫混 | 36. 暗灰褐色極細砂～極粗砂 小礫混 | |
| 9. 灰白色極細砂 | 37. 暗灰褐色砂質シルト～極細砂 | |
| 10. 茶褐色極細砂 細礫混(第1造構面ベース層) | 38. 黄褐色極細砂(しまり良) | |
| 11. 灰褐色極細砂 小礫混 | 39. 黄褐色極細砂(しまり良) | |
| 12. 暗茶褐色極細砂 細礫混(第2造構面ベース層) | 40. 暗灰褐色極細砂～極粗砂 | |
| 13. 黒褐色砂質シルト～粗砂 細礫混 | 41. 黒褐色砂質シルト～細砂(しまり良) | |
| 14. 淡黒色砂質シルト～粗砂 細礫混(第3造構面ベース層) | | |

Fig. 4 調査区南壁土層断面図

第2節 第4遺構面の遺構と遺物

第4遺構面は縄文時代の遺構面で、土坑2基、河道1条を検出した。遺構に伴う遺物の出土はなかった。

(1) 土坑

調査区の東端部で2基の土坑を検出した。この土坑は近接しており、埋土は淡黄褐色砂質シルトであったが、遺物は出土していない。人為的なものではなく、風倒木痕跡の可能性も考えられる。

(2) 河道

SR401 調査区の西端部で、河道SR401の東肩部を検出した。検出幅は6.5m、深さ1.6mである。寺田遺跡第139地点・第181地点の調査で確認された河道SR501と同一のものである。埋土は砂質シルトから粗砂層であるが、そのほとんどは小礫や中礫を含む砂礫層である。河道の底は暗灰褐色極細砂で人頭大の礫を含んでいる。図上で復元するならば、河道の幅は東西約24mになる。河道からの遺物の出土はなかった。第139地点・第181地点の調査では縄文時代晩期後半の篠原式の土器片が出土している。

(3) 縄文時代の遺物

縄文土器

第4遺構面に向けて暗黄茶褐色砂質シルト～粗砂層を掘削中に縄文土器6点と石鏃7点が出土した。

1は波状口縁の深鉢口縁部の破片である。口縁端部はやや肥厚して丸く収める。内湾する波状部分の外縁は、その縁に沿うように斜め方向に沈線が3条施されている。その下には弧を描くように2条以上の沈線が施されている。側面部はその幅いっぱいに太く深い沈線が楕円状に施されている。

2～5は深鉢の頸部から体部にかけての破片である。2は横方向の、3は縦方向の沈線に磨消縄文が施されている。4・5は沈線のみで縄文は施されていない。5は沈線の上に、同じ工具で、器壁に斜めから当たるように刺突文が施されている。

6は深鉢の頸部の破片である。1～5の色調が明黄褐色であるのに対して6は外面の色

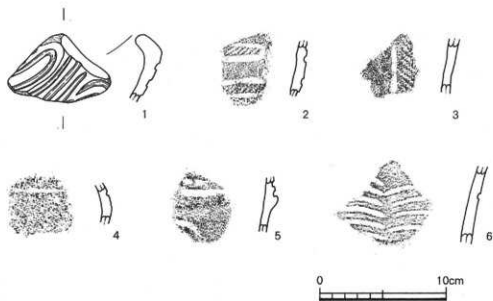


fig. 5 縄文土器

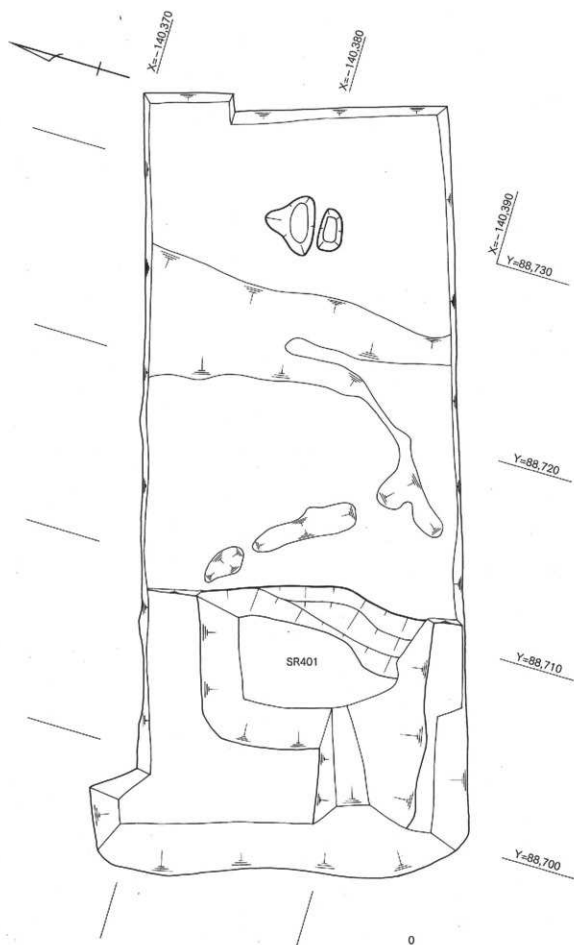


fig. 6 第4遺構面平面図

調は淡黒色を呈している。数条の緩やかな弧を描く圧痕で飾られている。

以上の縄文土器は縄文時代中期末の、北白川C式に属するものと考えられる。この時期の遺構は確認できなかったが、東隣の月若遺跡第81地点調査でも同時期の縄文土器の出土が報告されている。また、今回の調査地点の北側約200mに位置する月若遺跡第2地点でも同時期の縄文土器が出土している。

石鏃

7～13は打製石鏃である。7・8については縄文土器出土層と同一の土層から出土したものだが、9～13については第2遺構面直上からの出土である。しかし、ここで併せて報告する。12・13については小型品である。材質は全てサヌカイトで、器面は12以外は淡い灰色、12はやや黒味を帯びている。基部の形状は、9が平基式石鏃でそれ以外は凹基式石鏃である。調整は表裏全面に施されるものと、大剝離面を残すものがある。断面形は前者が菱形、後者が六角形状を呈する。

これらの石鏃は縄文時代に属するものと思われるが、時期の細別については不明である。法量は表1に示したとおりである。

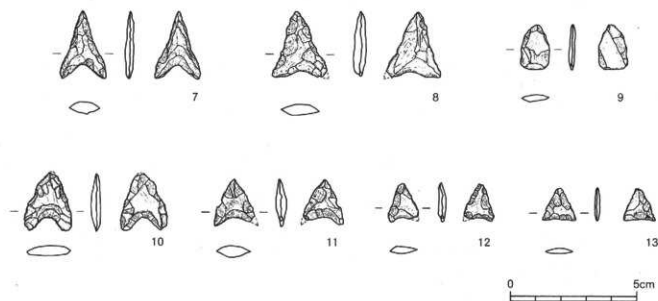


fig. 7 石鏃

遺物番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	基部
7	2.7	1.8	0.44	0.9	凹基
8	(2.6)	(2.1)	0.45	1.6	凹基
9	(1.8)	1.2	0.23	0.6	平基
10	(1.8)	(1.8)	0.42	1.3	凹基
11	1.9	(1.6)	0.45	0.8	凹基
12	(1.5)	(1.2)	0.30	0.4	凹基
13	(1.3)	1.3	0.20	0.2	凹基

表1 石鏃法量表

() 内は残存値

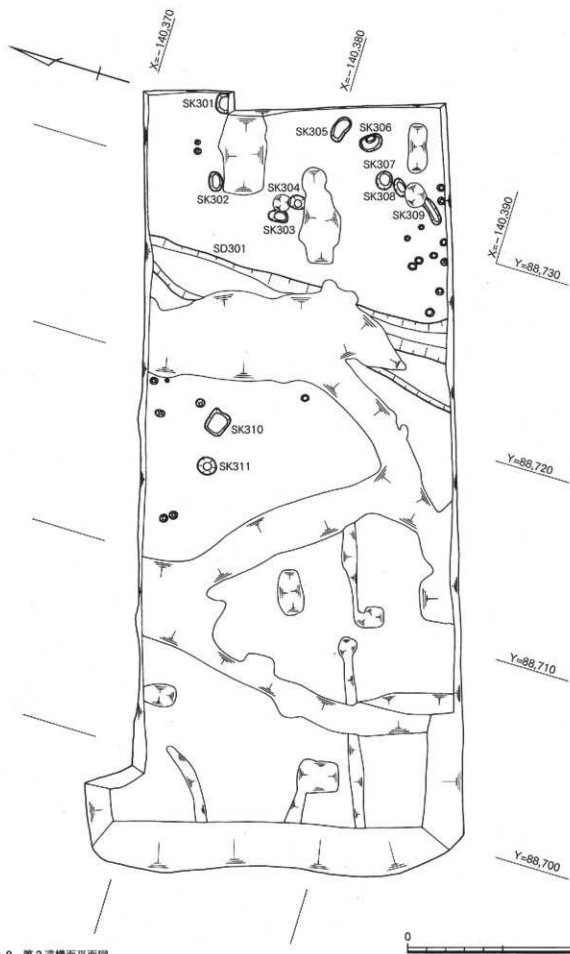


fig. 8 第3遺構面平面図

第3節 第3遺構面の遺構

第3遺構面からは土坑11基、溝1条、ピット20基を検出した。これらの遺構は調査区の東半部でのみ見つかった。

(1) 土坑

土坑は長径0.85m～1.35m、短径0.45m～1.05m、深さ0.11m～0.38mの範囲の規模を持ち、平面形は円形に近いものと楕円形のもの、方形に近いものがある。検出時には、そのほとんどは不明瞭なものであった。埋土は単一層で、淡黒色砂質シルト～粗砂層である。土坑からの出土遺物はない。各土坑の規模は表2に示したとおりである。

土 坑	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	形 状
SK301	1.00	(0.60)	0.18	楕 円
SK302	1.00	0.62	0.14	楕 円
SK303	1.05	(0.58)	0.25	楕 円
SK304	(0.72)	0.68	0.38	楕 円
SK305	1.35	0.75	0.18	楕 円
SK306	1.18	0.85	0.35	楕 円
SK307	0.85	0.80	0.25	ほぼ円形
SK308	(1.00)	0.58	0.14	楕 円
SK309	(1.50)	0.45	0.11	細い楕円
SK310	1.20	1.05	0.23	隅丸方形
SK311	0.90	0.80	0.21	ほぼ円形

表2 第3遺構面土坑法量表

() 内は残存値

(2) 溝

SD301 調査区の東半部で検出した南北方向の溝である。埋土は灰褐色極細砂を中心とした土層で、粒の揃った美しい砂で埋没している。北から南へ向かって流れていたものと考えられる。溝の幅は北端で2.5m、溝の南半では1段平坦面を有して幅が広くなり4.3mであった。深さは北部では0.47m、南部で0.78mである。溝からの遺物の出土はない。

第3遺構面の土坑や溝からは遺物が出土していないため、遺構面の時期を特定することはできないが、周辺での既往の調査成果から弥生時代中期から後期にかけての遺構面の可能性が考えられる。



挿図写真6 SD301 (東から)

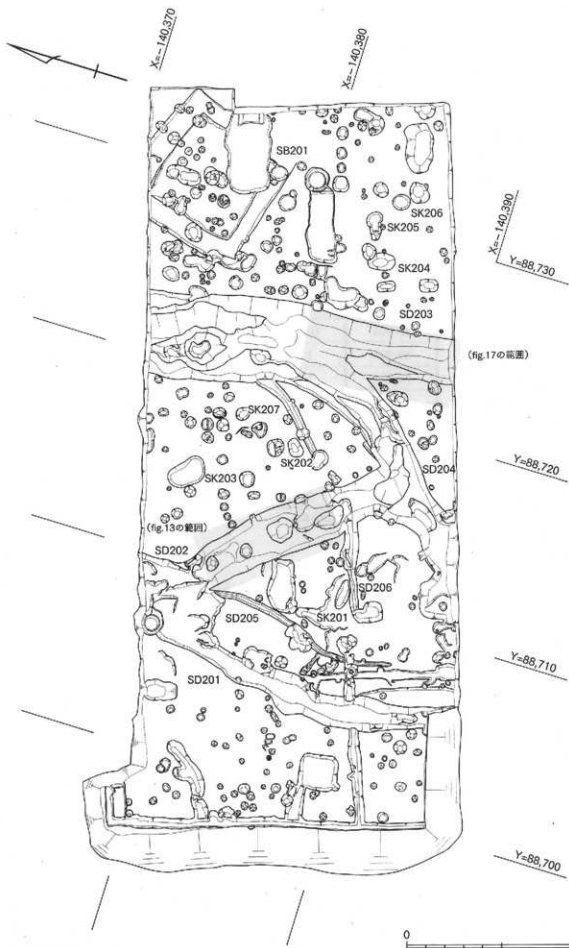


fig. 9 第2遺構面平面図

第4節 第2遺構面の遺構と遺物

第2遺構面からは竪穴住居1棟、土坑6基、溝7条、ピット多数を検出した。これらの遺構は弥生時代後期後半から末頃のものである。

(1) 竪穴住居

SB201 調査区の北東隅で検出した、南北7.1m、東西7.1m、壁高0.28mの方形の竪穴住居である。床面の周囲には幅1m内外のベッド状遺構が巡っている。

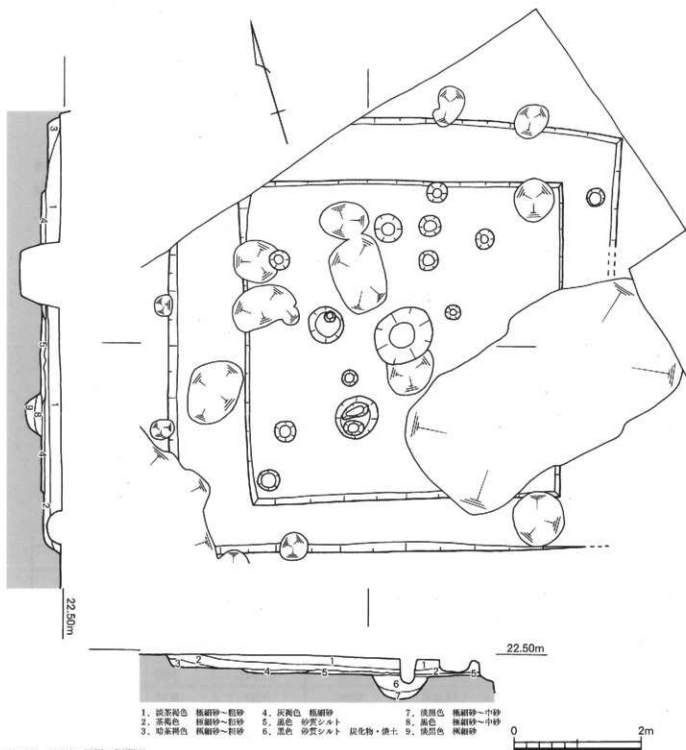


fig. 10 SB201 平面・断面図

床面で12基のピットを確認したが、その位置関係から、主柱穴は4本であると考えられる。ただし、その内1基は攪乱によって検出していない。柱穴の直径は0.3m内外である。周壁溝は確認できなかった。

床面のほぼ中央には直径1.2m、深さ0.35mのすり鉢状の中央土坑が検出されている。土坑の埋土には炭化物や焼土が含まれていた。

14～16は中央土坑から出土した土器である。14は鉢で、内弯して開く体部に、緩やかに屈曲して外方に広がる口縁部が付く。口縁端部は丸く収める。内面は横方向のヘラミガキを施す。15は壺の底部で内面をヘラミガキ調整している。16は甕の底部である。

17～21は竪穴住居の埋土から出土した甕である。17は緩やかに屈曲し端部を丸く収める口縁部が付く。外面はハケで調整している。口径15.0cm。18～20は外面にタタキを施した後に粗いナデで調整している。19は口縁部を強くヨコナデし、口縁端部に擬凹縁が巡る。これらの甕の胎土には赤クサリ礫を含んでいる。

(2) 土坑

土坑は長径0.88m～2.1m、短径0.6m～1.3m、深さ0.15m～0.90mの範囲の規模を持つものである。平面形は円形に近いものと楕円形のものがある。埋土は、SK201が黒褐色系の砂質シルト層が2層確認できた他は1層のみで、黒褐色極細砂～粗砂層である。土坑からの出土遺物はない。各土坑の規模は表3に示したとおりである。

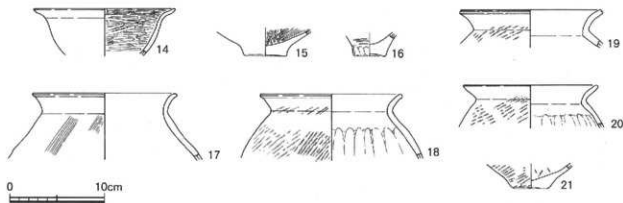


fig. 11 SB201 出土遺物

土 坑	長 径 (m)	短 径 (m)	深 さ (m)	形 状
SK201	1.60	0.62	0.17	楕 円
SK202	1.00	0.68	0.80	楕 円
SK203	2.10	1.30	0.18	楕 円
SK204	1.45	0.90	0.32	楕 円
SK205	0.88	(0.60)	0.90	ほぼ円形
SK206	0.94	0.90	0.15	ほぼ円形

表3 第2遺構面土坑法量表

() 内は残存値

(3) 溝

SD201 調査区の西端部で検出した、北から南に向けて流れる溝である。北端部は攪乱のため、一部不明である。検出した溝の長さは約17m、最大幅2.1m、深さは0.4m。一部溝底が深く抉られている所では0.85mの深さがあった。溝の断面は逆台形状である。埋土は極細砂～粗砂で小礫や中礫を多く含んでいる。

22は広口長頸壺の頸部で、外面は縦方向のハケの後にヘラミガキを施している。また、頸部と体部の境目には断面三角形の突帯が貼り付けられ、突帯の頂部と側面はヘラ状工具を用いて、細かく丁寧な連続刻目で加飾している。内面はナデで調整を行っている。

27は壺の底部である。上げ底の底部で、外面は丁寧なナデで仕上げている。胎土は均一な細かい砂粒で、色調は白っぽく、他と異なる土器である。

24・25は甕で、外面はタタキの後、ナデによる調整を行い、粗く磨り消されている。

SD202 調査区の中央部で北西方向から南東方向に向かう溝である。北端が攪乱のために不明であるが、SD201と合流するようにも思われる。南端では後述するSD204と合流している。検出した溝の長さは約12m、最大幅2.6mで深さは1.05m。溝底は平坦ではなく、起伏が著しい。部分的に強い流れによって抉られているようである。最大の深さは1.23mであった。溝の断面形は逆台形状の部分と底が緩やかに丸味を帯びる部分がある。

埋土は大きく分ければ3層で、最上層は茶褐色系の極細砂～粗砂層で小礫・中礫を含む。弥生土器片はこの最上層から最も多く出土している。中層には砂質シルト層が含まれる。最下層は極細砂と細礫の互層になっており、底付近には小礫・中礫を含む。このことから、溝はその半分近くまでが最下層の埋土で短時間のうちに埋没し、徐々に中層の埋土で溝が埋まりながらも溝の機能は果たしていたと思われる。この段階で溝底から出土する完形品の弥生土器が埋没したものと思われる。そして最終段階には上層の埋土で溝は短時間の内に覆われたと考えられる。

溝底からはいくつかの完形に近い弥生土器が出土している。26～31は広口壺である。26は直口する頸部から大きく屈曲して外反する口縁を持ち、肥厚させている。口縁端部はしっかりとした面になっている。外面は体部と頸部にハケを施し、後にヘラミガキを行っている。内面は横方向のハケ調整を施す。胴部最大径が中位から下半になる大型品である。

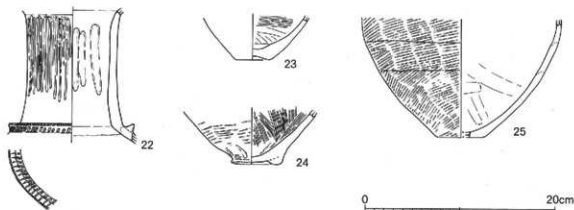


fig. 12 SD201 出土遺物

27は全形が窺えるもので、口縁は頸部から緩やかに開く。体部最大径が上位にあり、肩が張ったような球形を示す。口縁端部には面を持ち、ヨコナデによる窪みがわずかに残っている。体部外面はハケの後に縦方向のヘラミガキを施している。内面の上半は横方向のハケ、下半は縦方向のハケで調整している。底部に木葉圧痕がある。28も口縁端部に面を持つもので、体部は球形を呈し、外面をタタキの後にハケで調整し、さらにヘラミガキを施している。頸部にはハケの後ヘラミガキを施す。頸部外面には直径7mmの円形竹管文

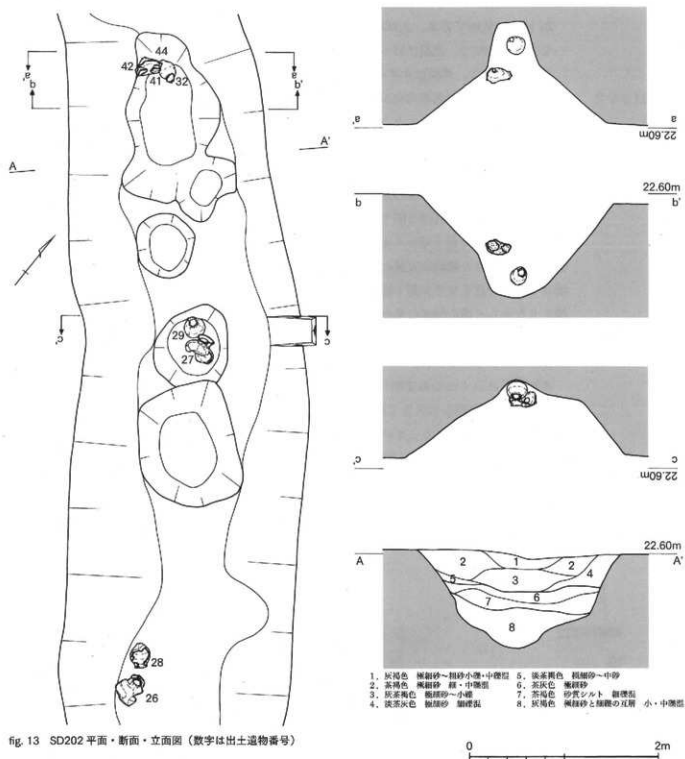


fig. 13 SD202 平面・断面・立面図(数字は出土遺物番号)

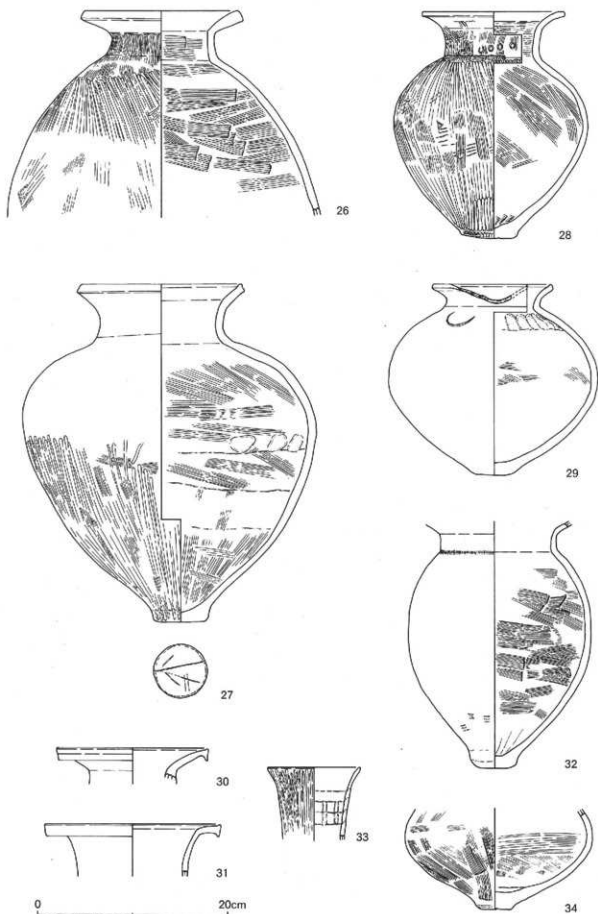


fig. 14 SD202 出土遺物 (1)

を連続して4個施す。体部内面はハケ、頸部内面は横方向のヘラミガキを施す。29は頸部が「く」の字状に屈曲し、外反する口縁部に至る。口縁端部は面を持ち、一部を扶って、片口部が作られている。球形の体部外面は丁寧にナデで仕上げ、肩部にヘラ状工具で刻んだと思われる半円形の記号文が1箇所ある。刻みの始まりと終わりには鋭さを感じる。胎土には赤クサリ曜が含まれる。内面の肩部には顕著なユビオサエの痕跡が残る。体部内面はハケで調整を行っている。

32は短頸壺である。体部から頸部、頸部から口縁部は明瞭に屈曲する。口縁端部は欠

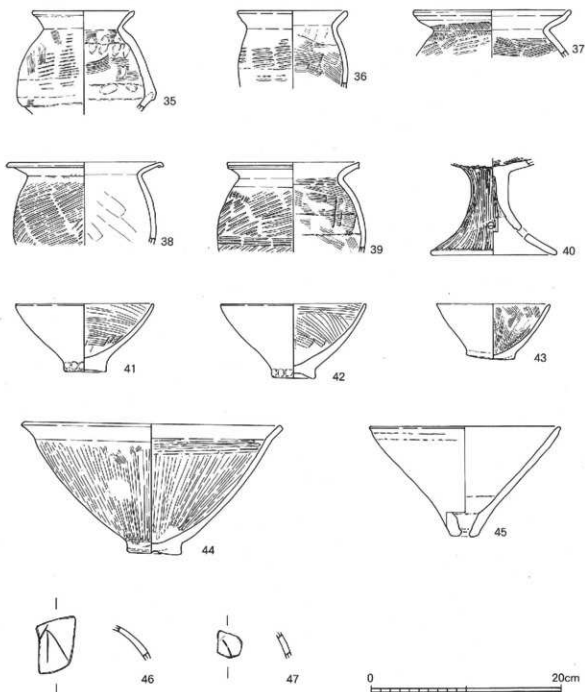


fig. 15 SD202 出土遺物 (2)

けている。体部外面は剥離し不明瞭だが、タタキの後にハケカナデを施している。体部内面は横方向のハケで調整している。

33 は長頸壺の頸部と口縁部で、外面をハケの後にヘラミガキしている。内面は粘土紐の接合痕が明瞭に残っている。34 は壺の底部で、内外面ともにハケで調整を施している。

35～39 は甕である。35 は底部と体部の接合痕跡が外面に非常に強く残ったままになっている。この部分について言えば、器形を整えるための作業を放棄したと言っても過言ではない。口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し、端部をやや尖り気味に収める。体部外面はタタキの後、ハケとナデを施している。体部内面にはユビオサエと粘土紐接合痕跡が明瞭に残り、粗くハケで調整を行っている。37 は口縁部に強いヨコナデによる凹部ができています。38 は頸部から強く屈曲した口端部を持ち、端部を下方に拡張して面を作っている。39 の口縁端部にはヨコナデによる擬凹線が入る。

40 は高杯の脚部である。外面をヘラミガキし内面にはしぼり目が残る。脚部の穿孔は4箇所である。

41 から44 は鉢である。41～43 の鉢は小型品で碗状の単純口縁を持ち、底部は41 がわずかに窪み、42 はあげ底、43 は平底になっている。外面はナデ、内面はハケで調整している。中型品の44 は「く」の字状の頸部を持ち、底部は中央部分が窪む。外面はハケの後ヘラミガキを施し、内面は頸部の直下では横方向、その下は縦方向のヘラミガキを施している。口縁端部は面を持つ。この41・42・44 については、44 の鉢の中に41 と42 が重ね合わさるように出土している。偶然か人為的なものかは述べるだけの根拠に乏しい。

45 は有孔鉢である。平底に焼成前の穿孔がある。底部はよく磨耗している。

46 と47 は線刻のある土器である。46 はヘラ状工具で三つ又様の線が無造作に刻まれている。広口壺の肩部辺りにあたると思われる。47 については、線刻と言えるかどうか疑問の残るところである。

SD203

調査区の東半部で北から南に向かう溝である。溝の中央辺りでSD204 が分流している。検出した溝の長さは約16m、北端では幅4.4m、南端では幅2.4m、深さは1.5m。溝底は南半部では比較的平坦であるが、北半部では強い流れによって部分的に抉られた所がある。溝の立ち上がりについても、底付近が抉られオーバーハングする部分がある。最も深いと

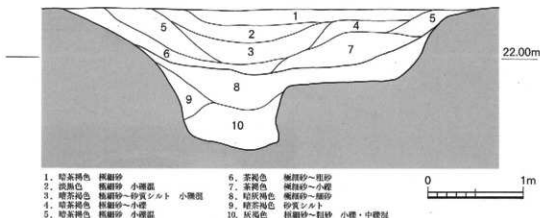


fig. 16 SD203 土層断面図

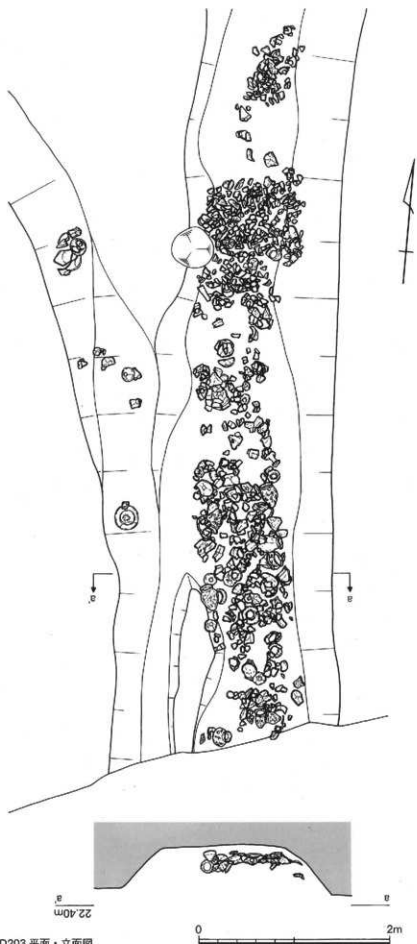


fig. 17 SD203 平面・立面図

ころでは1.76mであった。溝の断面形は緩やかな逆台形状になり、挟まれた部分については、さらに深くU字状に落ち込む。

埋土は大きく分ければ2層に分かれ、上層は暗茶褐色系の小礫混じりの砂質シルト～細砂層で、弥生土器はこの上層から最も多く出土している。下層は灰褐色系の極細砂～粗砂層である。下層が埋没した後に、溝の機能を果たしながらも徐々に埋没していったと考えられ、この段階でおびただしい数の土器が溝内に投棄されたと思われる。特にSD204と分岐する辺りから南側にかけは完形品や比較的大きな土器片を含む多くの弥生土器が出土している。土器の器種は壺・甕・高坏・鉢である。中でも甕の割合は非常に高くなっている。

このSD203は、第3遺構面で述べたSD301とほぼその方向を同じくしており、SD301が埋没した後も水の通り道のような状態であったと考えられ、まさにその場所にSD203が走っている。

48～54は広口壺である。「く」の字状の頸部から斜め上方に広がる口縁部を持つもの(48～51)と、筒状の頸部に斜め上方に広がる口縁部を持つもの(52～55)がある。48・49は口縁端部を丸く収め、50～52は口縁端部を揃み上げ面を持つものである。

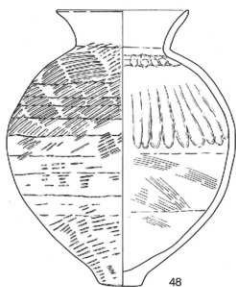
48は体部外面をタタキの後にナデで調整し、下半は半磨り消しである。粘土紐の接合痕跡が比較的明瞭に残る。内面は上半がナデ、下半はハケで調整している。49の外面はタタキ、内面上半部は横方向のハケで調整されている。50・51は外面をタタキ後ハケで調整している。52は体部最大径が中位よりやや上に位置する。体部外面はタタキを施した後に縦方向の粗いヘラミガキで調整している。体部内面は上半が縦方向のハケ、下半はナデを施す。底部には木葉圧痕が残る。53は頸部から緩やかに開いて口縁部に至り、口縁端部は上下に拡張している。わずかにヨコナデによる凹部が残る。扁球形の体部は中位が最大径となり、横方向のヘラミガキを施している。上半と下位には斜め方向のヘラミガキを施す。下位にはユビオサエの痕跡が残る。頸部外面はハケの後に粗く縦方向のヘラミガキを行う。体部内面には粘土紐接合痕跡が残り、口縁部内面は横方向のヘラミガキを粗く施している。底部は中央部が窪む。54は二重口縁を持つもので、口縁端部を上方に屈曲させ面を有する。

55は広口長頸壺である。頸部から強く屈曲した口縁部が大きく外に開く。口縁端部は面を持ち、擬凹線が1条巡る。頸部内外面を縦方向のヘラミガキで調整する。

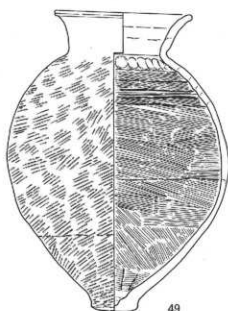
56は長頸壺である。口縁部上半が緩やかに開き口縁端部に面を持つ。口縁部外面はハケの後にヘラミガキを施す。口縁端部はヘラ状工具による連続刻目が入り、1条の擬凹線が巡る。頸部と体部の境にもヘラ状工具による連続刻目が入る。頸部内面は横方向のハケで調整している。

57・58は上下に拡張した口縁端部にヘラ状工具による連続刻目と1条の凹線が巡る広口壺である。口縁部内面はヘラミガキを施す。58の頸部外面は縦方向のハケで調整をしている。肩部には、3線1条の櫛描きで、上から波状文、直線文、波状文、直線文の順で加飾している。

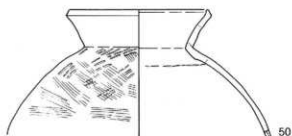
59は広口壺の頸部と肩部のみである。肩部には断面三角形で無文の貼付突帯を巡らせ、



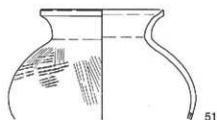
48



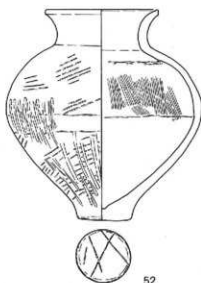
49



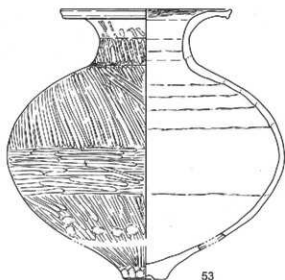
50



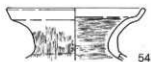
51



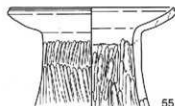
52



53



54



55

fig. 18 SD203 出土遺物 (1)



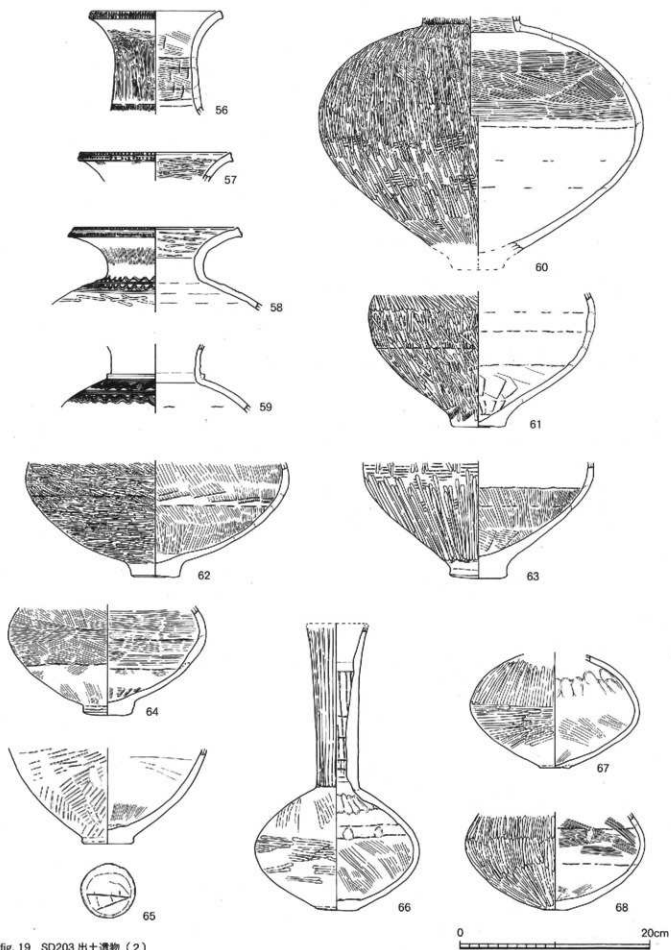


fig. 19 SD203 出土遺物 (2)

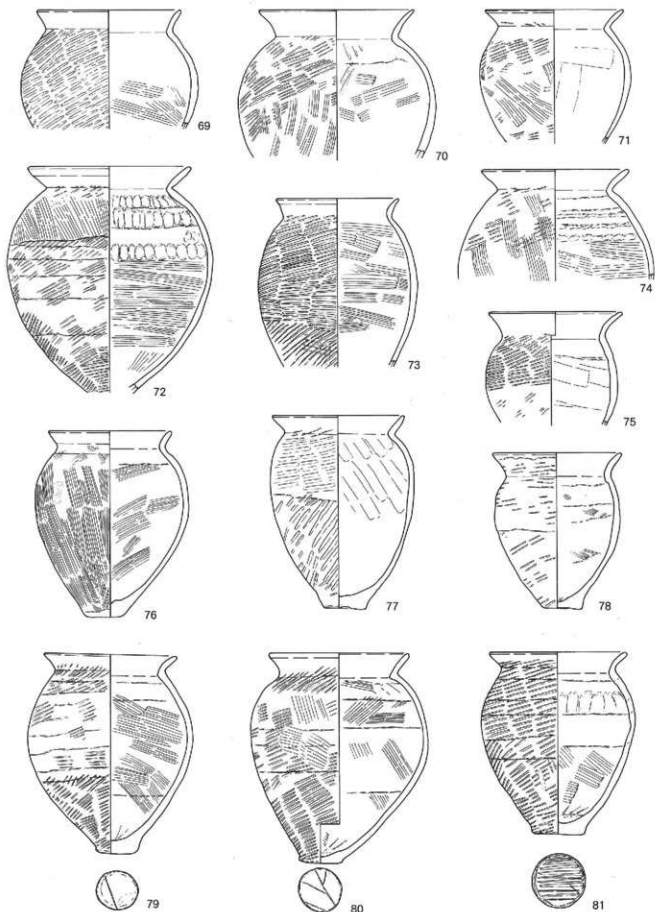


fig. 20 SD203 出土遺物 (3)

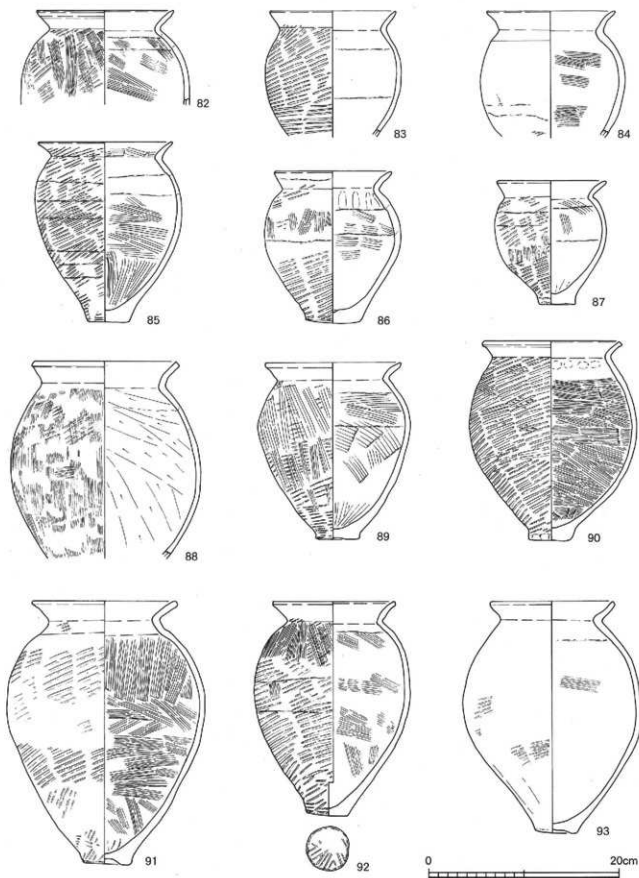


fig. 21 SD203 出土遺物 (4)

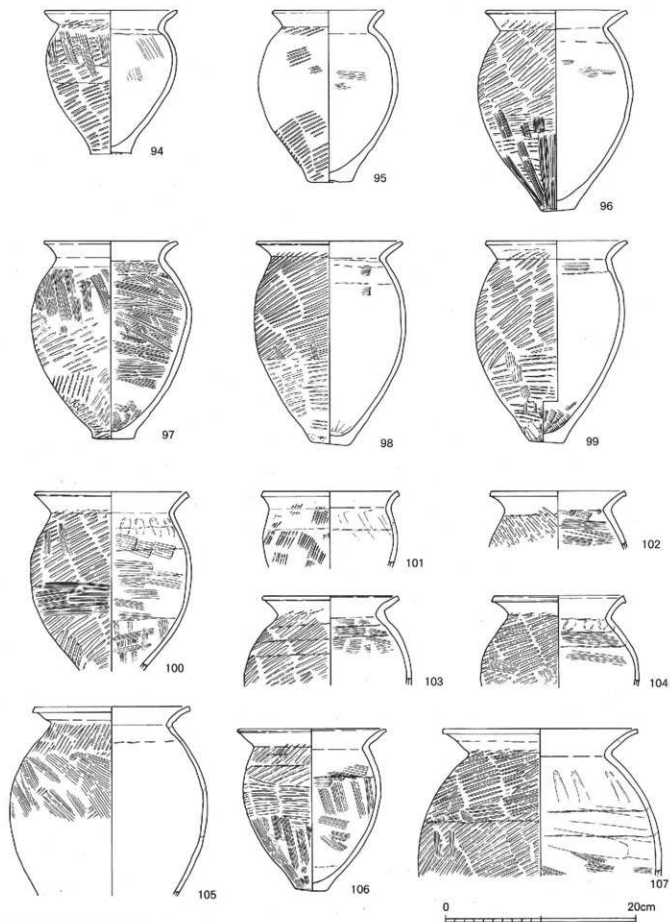


fig. 22 SD203 出土遺物 (5)

9線1条の櫛描きで、上から直線文、波状文、直線文、波状文の順で加飾する。櫛描波状文には、施文原体をコンパス様に反転させている部分がある。胎土には角閃石を含み、生駒西麓産の壺と考えられる。

60～65は壺である。60は扁球形の壺の体部で中位よりやや上に最大径が来る大型品である。外面の上半はハケの後に縦方向のヘラミガキ、中位はヘラミガキ、下半は粗いタタキの後にヘラミガキを施している。底部付近は縦方向のハケが残っている。内面は上半がハケ、下半は粗いナデで調整している。62～64はしっかりとした突出する底部を持つ。

66～68は細頸壺である。66は円筒形の頸部にやや開いた口縁部が付く。口頸部の外面は縦方向にヘラミガキを施し、体部はヘラミガキを施す。口頸部の内面はしぼり目が明瞭に残る。口縁部内面はヨコナデで調整している。体部内面は粘土紐接合痕跡やユビオサエが残り、下半部はハケで調整を行っている。67・68についても、外面はヘラミガキ、内面はハケで調整している。

69～87は口縁端部を丸く収める甕である。体部の最大径は上半から中位にある。頸部が「く」の字状に明瞭に屈曲し外反する口縁部に至るもの(69～72・74・75・77・79・80・82・83・85～87)と緩やかに屈曲し外反する口縁部に至るもの(73・76・78・81・84)がある。71・72・74・76・80・82・86・87については、体部外面にタタキを施し、ハケで調整している。77・78・79・84は体部外面にタタキを施した後に、ナデで調整している。体部上半と下半のタタキの方向が異なる分割成形によるものや、口縁部のタタキ出し技法によるものなどがある。体部内面はハケないしは板ナデによって調整されている。72・74・81はユビオサエや粘土紐接合痕跡が明瞭に残るものである。79・80は底部外面に木葉圧痕が残る。81の底部外面にはタタキが残る。84は粒子の細かい胎土をしており、他のものとは異質である。

88～109は口縁端部に面を持つ甕である。100～102の口縁端部はわずかに下方に拡張し、104の口縁端部は上下に拡張して面になる。体部の最大径は上半から中位にある。頸部が「く」の字状に屈曲し、外反する口縁部に至るもの(88～92・95・96・98～100・102～109)、内弯する口縁部に至るもの(93)と緩やかに屈曲し外反する口縁部に至るもの(97・101)がある。94の口縁端部はやや歪み、外反する部分と内弯する部分がある。88・89・92・94・96～98・100・104～107・109は体部外面にタタキを施し、ハケで調整するもの、67・108は体部外面にタタキを施した後に、ナデで調整するものである。99は体部外面にタタキを施した後に、ハケとナデで調整している。93は体部外面が剝離して不明瞭だが、タタキ後に板ナデで調整している。90は体部外面の上半に、左上がりのタタキを施した後に右上がりのタタキを施している。98・108は体部外面下半部のタタキを半磨り消しにしている。102はタタキの方向が左上がりで施され、半磨り消しになっている。左上がりのタタキはこの1点のみである。内面は88がヘラケズリで調整している。その他はハケまたはナデか板ナデで調整している。頸部内面にユビオサエの残るものもある。91は底部の中央が窪む。92は底部外面にタタキが残るものである。

110～126は口縁端部を積み上げている甕である。体部の最大径は上半から中位にある。頸部が「く」の字状に屈曲し、外反する口縁部に至るもの(110・113～116・121・

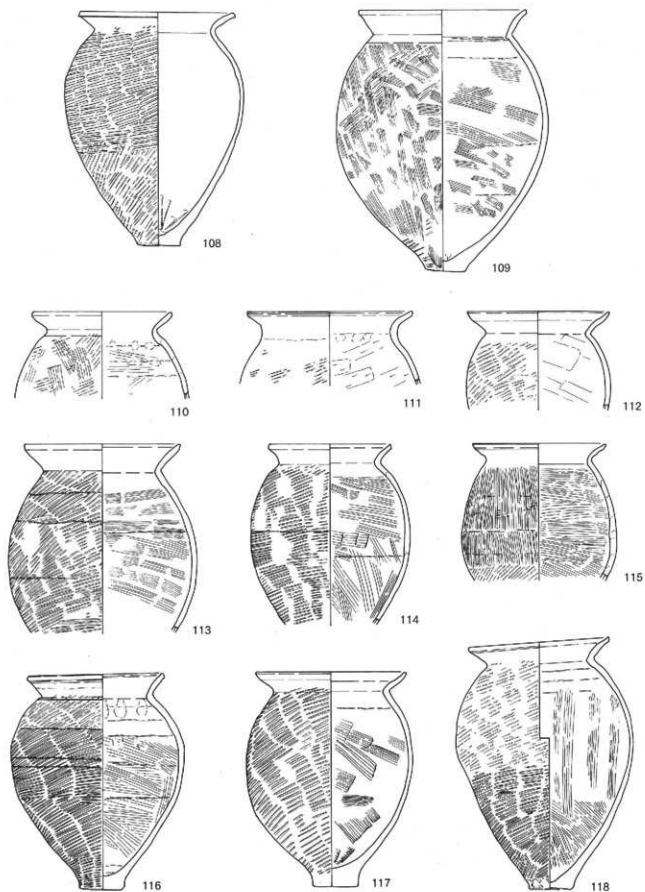


fig. 23 SD203 出土遺物 (6)

124)、内弯する口縁部に至るもの(112・117・120)、緩やかに屈曲し外反する口縁部に至るもの(111)と口縁端部が受け口状になるもの(118・119・122・123・125・126)がある。110・115・124・126は体部外面にタタキを施し、ハケで調整するもの、111・112・114・116～119・121～123・125は体部外面にタタキを施した後に、ナデで調整するものである。ナデによってタタキを完全に消すものと半磨り消しにするものがある。体部上半と下半のタタキの方向が異なる分割成形によるものや、口縁部をタタキ出し技法によって形成しているものがある。内面は111がヘラケズリ、その他は多くがハケ調整を行い、板ナデのものもある。119～121は底部外面に木葉圧痕が残る、119は中央部が窪んでいる。

127～131は口縁端部に擬凹線が巡る甕である。128は球形に近い体部で、中位に最大径をもつ。体部外面にタタキを施した後に、最大径付近をハケで調整している。129・130も体部外面にタタキを施した後、部分的にハケで調整している。131は体部外面のタタキを半磨り消している。

132～136は口縁端部が歪んでいる甕である。134以外は口縁部をタタキ出し技法によって作り出している。132・135は直行する口縁を持ち、口縁端部を尖り気味に収める。133・134は「く」の字状の頸部から屈曲して、外反する口縁部に至るもので、136は内弯して口縁部に至るものである。135・136の体部外面はタタキの後に粗くナデ調整を行っている。134は色調が茶褐色を呈し、他のものと異なる。体部外面はタタキの後にハケ調整を行い、さらに丁寧なナデでタタキの痕跡を消している。132の体部内面は単位の細いヘラケズリを行っている。

137の甕は頸部が「く」の字状に屈曲し、直線的に延びる口縁部に至るもので、口縁端部に面を持つ。口縁端面にはタタキが施されている。いわゆる「淡路型甕」である。体部外面はタタキが施され、粗いナデで調整している。体部内面はハケで調整され、上半にはユビオサエの痕跡が残る。口縁部内面は横方向のハケで調整している。底部外面はわずかに小さく窪み、木葉圧痕が残っている。

138の甕は頸部が「く」の字状に強く屈曲し、外反する口縁部に至るものである。口縁端部を内傾して摘み上げ、口縁端面に1条の擬凹線が入る。体部内面はナデ調整を行っている。「東阿波型甕」の可能性はある。

139・140は小型の甕で、139は緩やかに屈曲する頸部から短く外反する口縁部を持ち、体部外面にタタキを施し、下半はナデ調整を行っている。体部内面は上半がハケ、下半はナデである。140は緩やかに屈曲する頸部から短く直行する口縁部を持つ。体部外面の頸部にはハケ、体部はタタキ後にナデとミガキ調整を行う。141・142は甕の底部である。

143～152は、体部と口縁部の境に稜を持つ坏部からなる高坏である。口縁部は強く屈曲して大きく外反するものやわずかに外反するものがある。152はやや直線的に上方に広がる。口縁端部は丸く収めるものが多いが、144は面を持ち、1条の擬凹線が入る。147は口縁端部を若干摘み上げている。149は口縁端部をわずかに下方に拡張させている。体部や口縁部の外面には縦方向のヘラミガキを施すものが多いが、151の口縁部外面は横方向のヘラミガキを行っている。143～149は脚部を欠くが、150～152はいずれも筒部か

ら屈曲して広がる脚部を持ち、中空で内面にしぼり目を残す。152は筒部と脚部の境が明瞭である。脚部の穿孔は4箇所である。

153～159は浅い壺状の坏部を有する高坏である。坏部外面は153・154がハケ、158はハケの後にヘラミガキを施す。159はタタキの後にタタキ痕跡をナデで消している。脚

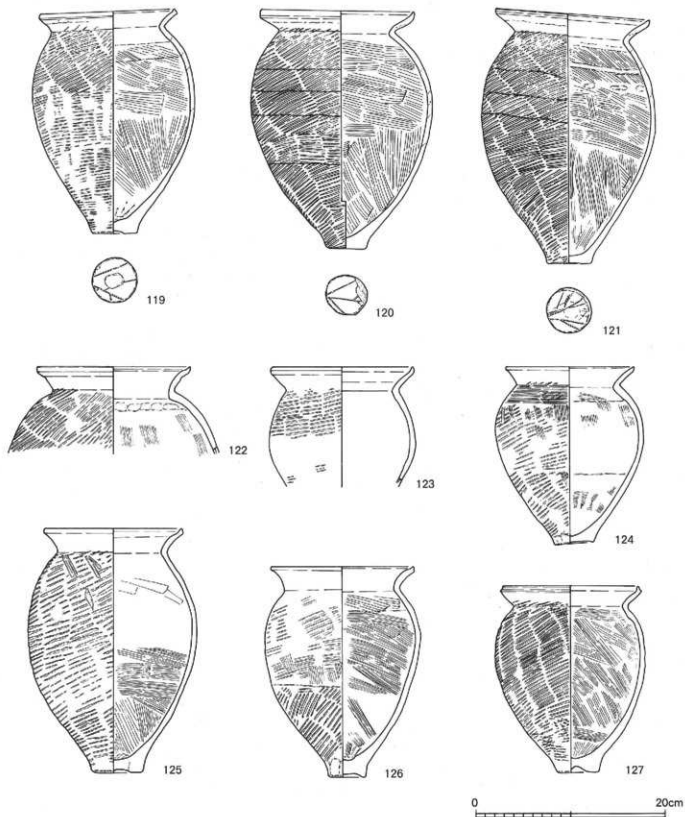


fig. 24 SD203 出土遺物 (7)

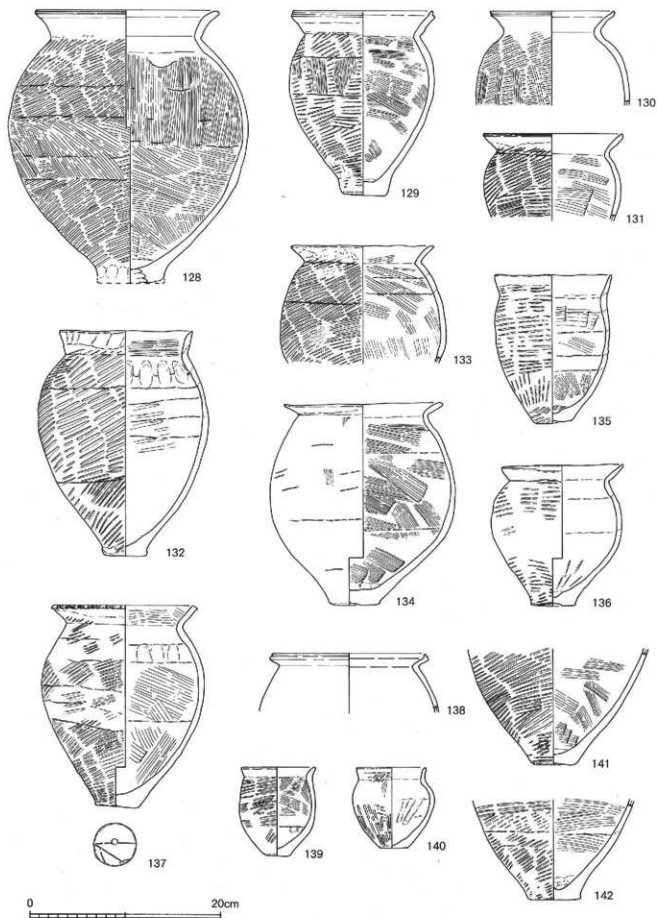


fig. 25 SD203 出土遺物 (8)

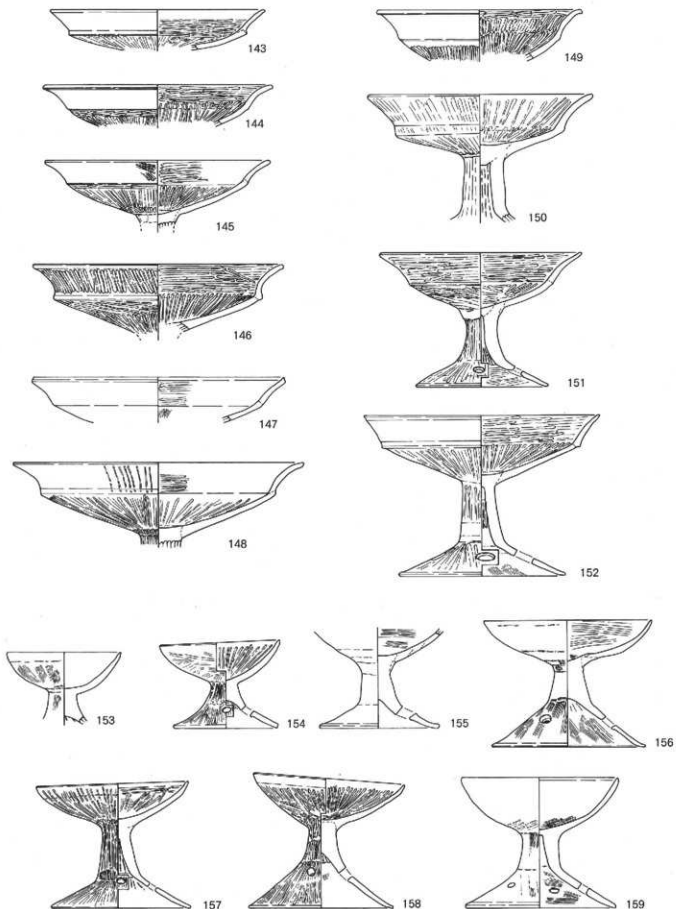


fig. 26 SD203 出土遺物 (9)

部は157・159が中空であるが、それ以外は中実である。脚部外面は156・159がハケ、154・157はヘラミガキ、158はハケの後にヘラミガキを施す。脚部の穿孔は155・156が3箇所、154・157が4箇所、159は5箇所である。149は坏部内面にわずかに赤色顔料の付着が認められる。

160～162は小型の高坏である。160は体部と口縁部の境にわずかに綾が認められる。口縁部は外反して端部を丸く収める。内面は坏部を放射状に、口縁部を横方向のヘラミガキで施す。161は体部と口縁部の境をわずかに下方に拡張させ綾を成している。口縁端部に1条の擬凹線が入る。口縁部、体部と脚部の外面にはヘラミガキを施し、口縁部内面は横方向の、坏部内面は放射状のヘラミガキを施す。162は口縁端部に1条の擬凹線が入る。

163は大型の有段口縁高坏の坏部である。体部外面はハケの後にヘラミガキを施す。緩やかな坏部から上方に屈曲し、さらに外側に屈曲した口縁が付き、口縁端部を斜め方向に摘み上げて、尖り気味に収める。内面は放射状のヘラミガキを施している。

164～176は高坏の脚部である。164・165・167・168・175・176は筒部から屈曲して脚部が広がるものである。166・169・171～174は屈曲せずに緩やかに筒部から脚部が広がる。170は筒部から屈曲して、脚部が段を有して二重になるものである。脚部には1条の沈線が回り、上下2段に4方向の円孔が穿たれる。164は外面をハケの後にナデ、166は外面をハケの後にヘラミガキ、165・167～170・172～175はヘラミガキを施す。168は脚端部に1条の擬凹線が巡る。175は筒部にヘラ状工具で上から順に2条、2条、3条の細い沈線が回り、中断と下段の沈線の間に斜め方向の細い沈線が入る。脚端部には1条の擬凹線が巡る。

151・155・164・166は脚部と坏部の接合部に粘土紐を貼り付けてナデ調整を行い、補強をしている。

177は器台の脚裾部と思われる。脚柱部には上下2段、各4方向の穿孔を行う。外面はヘラミガキを施し、脚端部はヨコナデで調整している。

178～185は小型の鉢である。境状の単純口縁を持つもので、178～180・182～184は口縁端部を尖り気味に収めるもので、181・183は口縁端部を丸く収める。体部は181が直線気味に立ち上がり、その他のものは若干内弯して立ち上がる。178・181・182は底部外面が若干窪む。185は突出した底部を持つ。184・185の底部外面には木葉圧痕が残る。178～180は体部外面にタタキを施し、ナデで半磨り消しする。

186は大型の鉢で、しっかりとした底部から緩やかにやや内弯気味に立ち上がる口縁を持つ鉢である。

187～189は有孔鉢である。孔はいずれも焼成前に穿孔している。187は平底のもので、188の底部はやや窪む。187には3箇所の穿孔が施されている。189は小平底のものである。外面はタタキ、内面はハケで調整している。188・189はタタキ後にナデ調整を行う。

191～195は「く」の字状の頸部を持つ中型の鉢である。191～193は口縁端部に面を持ち、194・195は摘み上げるものである。体部外面の調整は192がタタキの後にナデ、193が上位は横方向のヘラミガキと下半は縦方向のヘラミガキを施す。194・195はハケの後にヘラミガキを施している。193の色調は暗赤橙色で、特異なものである。195は口

縁端部に2条の擬凹線が入る。内面はハケかヘラミガキで調整している。

196は内弯気味に立ち上がる体部を持つ鉢で、口縁端部に面を持ち、わずかに凹む。体部外面は縦方向のハケ、体部内面はナデ調整である。

197は直行する口縁部を有する小型の鉢で、口縁端部は丸く収める。体部外面は縦方向

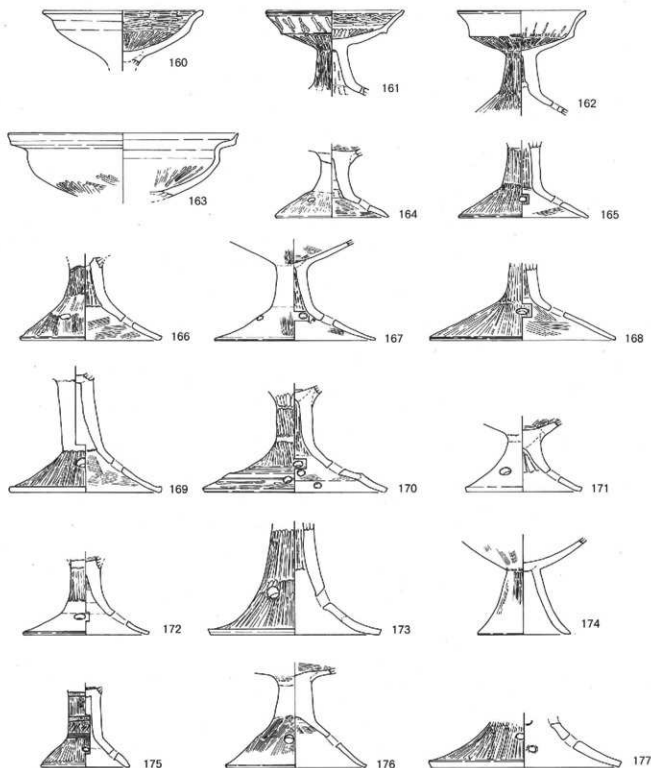


fig. 27 SD203 出土遺物 (10)

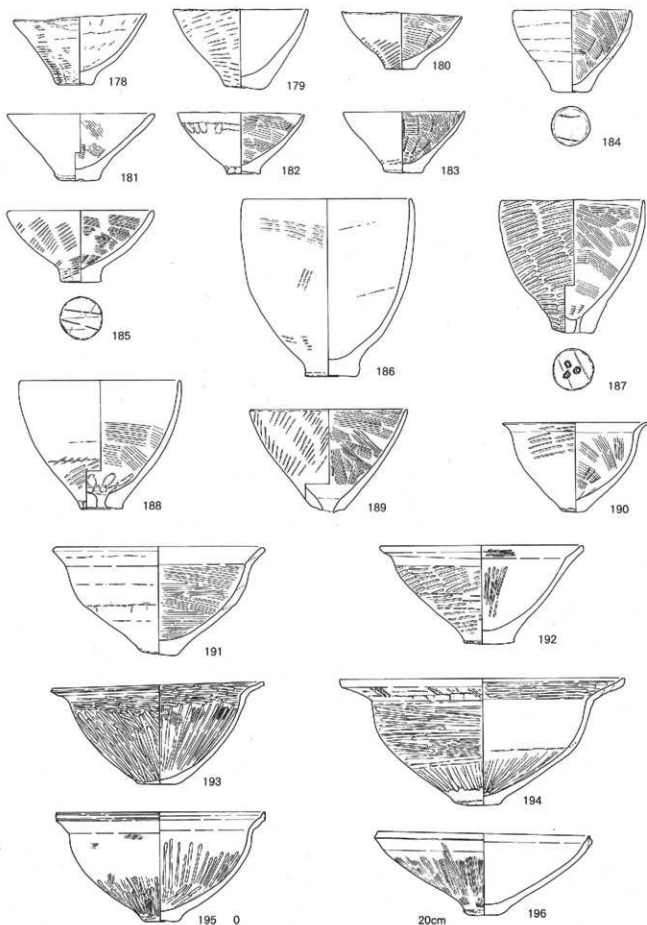


fig. 28 SD203 出土遺物 (11)

のハケ調整。体部内面はハケとナデで調整している。底部外面は小さく窪む。

198 から 201 は大型の鉢である。198 は「く」の字状の頸部から外反する口縁部を持ち、口縁端部は丸く収める。体部外面は上位でタタキの後、半磨り消しにする。下半部と内面はヘラケズリを行っている。199 は肩の張らない体部から屈曲して、直線的に外方に開く口縁部を持つ。口縁端部は面を成し、タタキを施す。口縁部外面は横方向のヘラケズリ、体部外面はハケを施した後に上半部は斜め方向の、下半部は縦方向のヘラミガキで調整する。頸部の屈曲部はタタキの後にヨコナデで調整する。内面は口縁部から体部上半は横方向のヘラミガキを、下半部は縦方向のヘラミガキを施す。200 は半球形の体部から頸部が屈曲して外反する口縁部を持つ。口縁端部は面を持ち、片口部が作られる。口縁部外面は

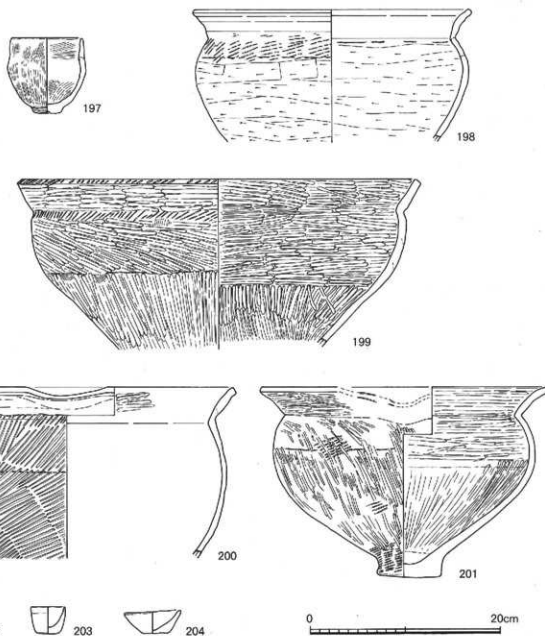


fig. 29 SD203 出土遺物 (12)

ヘラミガキ、体部外面はタタキを施している。体部内面は摩滅のために不明であるが、ヘラミガキと考えられる。201も半球形の体部から頸部が屈曲して外反する口縁部を持つ。口縁端部は面を持ち、片口部が作られる。口縁部外面は横方向のヘラミガキ、体部外面はタタキを施した後にハケ調整を行い、さらにヘラミガキで調整している。口縁部内面と体部上半は横方向のヘラミガキ、体部下半は縦方向のヘラミガキで調整している。底部は突出している。

202～204は鉢形のミニチュア土器である。

SD204

調査区中央部南半で検出した溝である。SD203から分岐し南西方向に向かい調査区外に延びている。検出した溝の長さは約11m、幅は2.2m、深さは0.7m。溝底はSD202やSD203と同様に部分的に深く抉られている。SD202と合流する辺りが最も深く、1.07mを測る。溝の断面形は、SD203と分岐した近くでは溝の肩部からいったん下がり、一段平坦面を残し深く落ち込む。南端部では逆台形状を呈する。

溝の埋土の上層は茶褐色系の極細砂で、最下層は灰褐色の極細砂である。下層には中礫や小礫が多く含まれていた。

溝からの出土土器205は短頸壺である。短く外反する口頸部を持ち、口縁端部は下方に拡張し面を作る。体部外面はハケ、体部内面はハケと板ナデで調整している。

206は小型の広口壺である。短い筒状の頸部から緩やかに外反する口縁部を持ち、口縁端部はやや下方に拡張し面を持つ。体部外面はハケ、体部内面はナデで調整している。

207は有孔鉢の底部で、焼成前に穿孔を行う。208は甕の底部で、わずかに凹む。

209は「く」の字状に強く屈曲する頸部から直線状に外方に開く口縁部を持つ甕である。口縁端部には面を持ち、体部外面はタタキ後に縦方向のハケを施す。体部内面は上半がハケ、下半はナデで調整している。口縁端部には一部を抉って片口状にしている部分がある。抉った部分には、直径1～3mmの棒状工具による焼成前の刺突痕が3箇所あり、あらかじめ穿孔を施した後抉った様子が窺える。

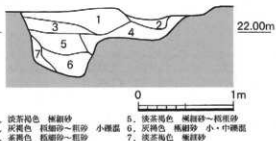


fig. 30 SD204土層断面図

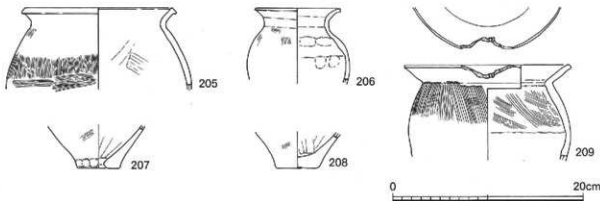


fig. 31 SD204出土遺物

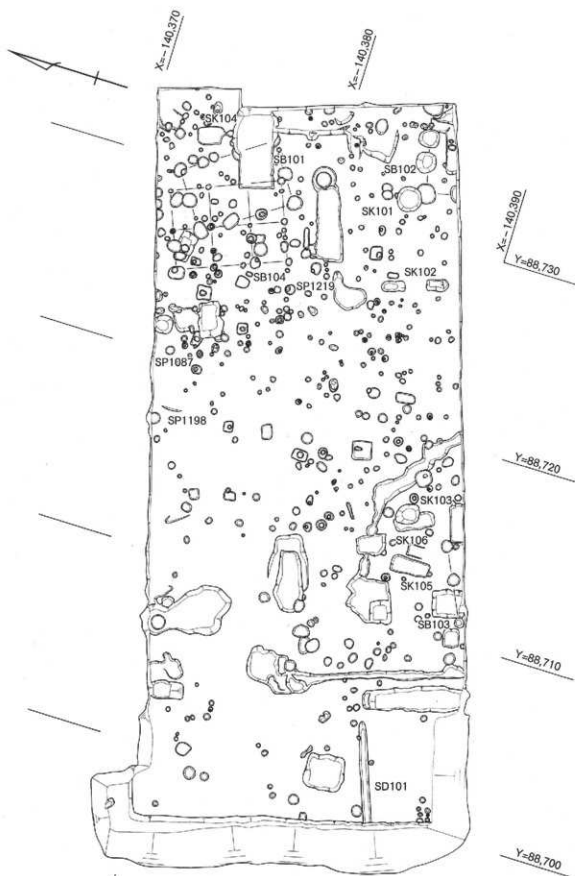


fig. 32 第1遺構面平面図

第5節 第1遺構面の遺構と遺物

第1遺構面からは掘立柱建物4棟、土坑6基、溝1条、ピット多数を検出した。遺構は調査区の全域に広がっているが、西半部の密度が高い。検出遺構は古墳時代から中世にかけてのものである。

(1) 掘立柱建物

SB101 調査区の東北部で検出した掘立柱建物で、南北3間、東西2間の建物である。建物の規模は南北5.2m、東西3.4mを測る。柱間は南北が1.4m～1.8m、東西が1.7m～1.8mである。柱掘形の大きさは長径0.65m～0.95m、短径0.65mの楕円形と円形のものがある。柱痕の残っているものでは、その直径は0.3mであった。深さは0.46m～0.66mである。

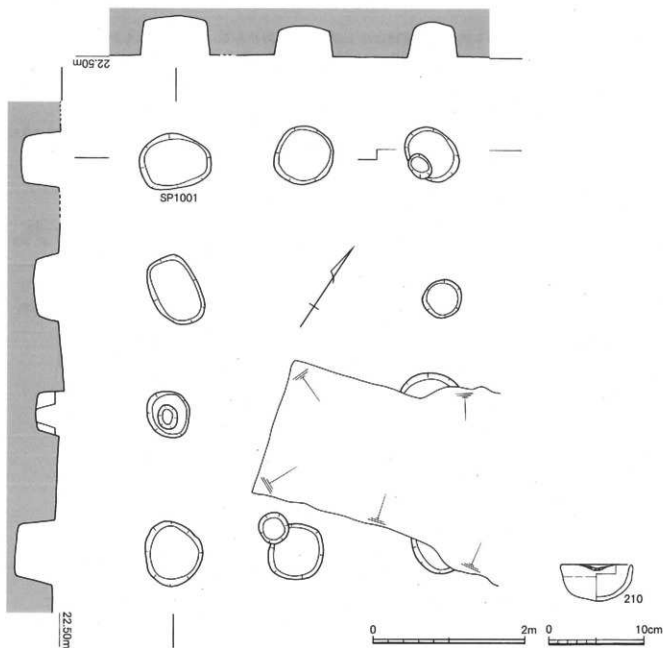


fig. 33 SB101 平面・断面図

fig. 34 SB101-
SP1001 出土遺物

建物主軸の方向は北から西へ 33° 振っている。

柱穴から出土した遺物には土師器、須恵器があり、図化できたものは土師器の甕 (210) である。210は柱穴SP1001から出土した小型の甕で、手づくねの後にナデによって成形し、口縁端部をやや尖らせ気味にヨコナデしている。口縁部の一部を一方向から押して片口を作っている。この建物の時期は飛鳥時代から奈良時代前半になる可能性が高いと考えられる。

SB102 調査区の東半部の南壁際に検出した掘立柱建物で、南北1間以上、東西3間以上の建物である。調査区外に延びるため、全体の規模は不明であるが、南北1.6m以上、東西4.6m以上を測る。柱間は南北が1.6m、東西が1.2m～1.7mである。掘形の大きさは直径1m内外である。深さは0.57m～0.77mを測る。建物の主軸の方向は北から西へ 13° 振っている。

柱穴から出土した遺物には土師器、須恵器がある。図化できたものは須恵器 (211・212) で、この建物の時期は古墳時代後期末から飛鳥時代に属するものと考えられる。

211は須恵器環蓋である。口縁端部は丸く収める。天井部の回転ヘラケズリの範囲は狭い。口径は10.6cmを測る。212は須恵器杯身で、口径は13.4cmを測る。

SB103 調査区の西部の南壁際に検出した柱穴列で東西2間分を確認した。対応する柱穴は見つかっていないが、柱穴掘形の規模などから判断して、調査区外南側に延びる掘立柱建物と思われる。東西4.1m以上を測る。柱間は2.0mである。柱掘形の大きさは直径0.45m～0.65mの円形のもので、深さは0.28m～0.72mである。柱痕に残っているものでは、その直径は0.18mである。建物主軸の方向は北から西へ 26° 振っている。

柱穴から出土した遺物は土師器、須恵器の小片で、図

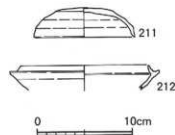


fig. 35 SB102-SP1218 出土遺物

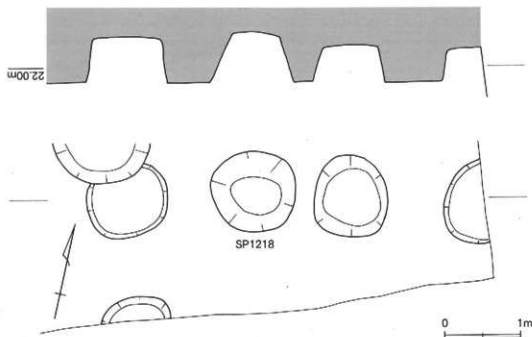


fig. 36 SB102 平面・断面図

化できるものはなかった。この建物の時期は古墳時代後期末から飛鳥時代に属するものと考えられる。

SB104

調査区の東北部で検出した総柱の掘立柱建物で、南北3間、東西2間の建物である。建物の規模は南北5.9m、東西4.2mを測る。柱間は南北が1.8m～2.1m、東西が2.1mである。柱掘形の大きさは直径0.24m～0.6mの円形のものである。柱痕に残っているものでは、その直径は0.2m内外であった。深さは0.51m～0.60mである。SP1038は柱穴底に入頭大の礎盤を据えていた。建物主軸の方向は北から西へ21°振っている。この建物は調査区の北壁際で見つかったものであり、さらに北側に延びる可能性も残っている。

柱穴から出土した遺物には、土師器、須恵器があり、図化できたものは土師器の小皿(213・214)と須恵器の碗(215)である。

213は口縁部がヨコナデ、底部はヘラ切りである。これらの遺物から、この建物の時期は鎌倉時代前半と考えられる。

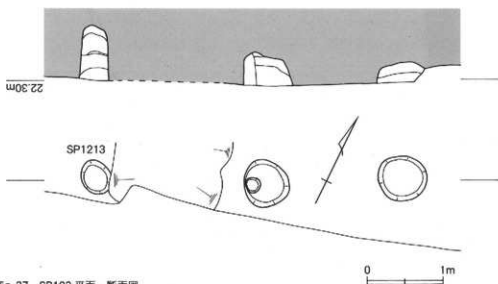


fig. 37 SB103 平面・断面図



挿図写真7 SB103-SP1213 断面



fig. 38 SB104 出土遺物

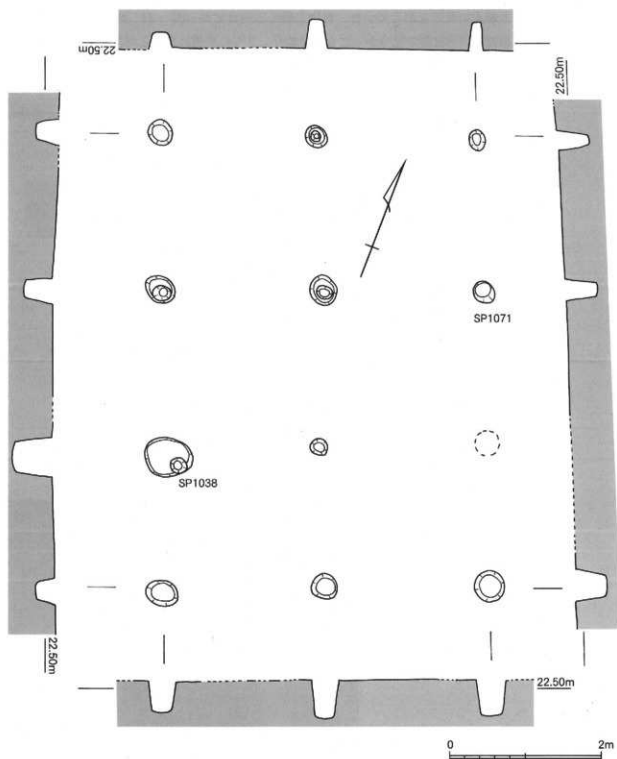


fig. 39 SB104 平面・断面図

(2) 土坑

SK101 調査区東半部で検出された、円形の土坑である。底面は平坦で、逆台形状に壁が立ち上がる。埋土の上層は極細砂から粗砂層で下層は砂質シルト層であった。下層の砂質シルト層からは完形の土師器の大皿(216)が1点出土している。

216の大皿は、底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部外面に面取りを施している。底部と内面はナデで成形し、口縁部は回転ナデで仕上げている。

SK103 調査区中央部で検出したSK103、北東部で検出したSK104は、埋土に炭化物が含まれていた。

SK104はその平面形が隅丸方形で、南側短辺の一部がわずかに突出し、そこから直径0.3mの円形の穴が取り付いている。土坑底面は凹凸があり、中央辺りの底面には直径0.45mの焼土面が存在した。

SK105 調査区中央部で検出したSK105とSK106は近接して検出した土坑である。どちらも埋

SK106には炭化物を含んでおり底面に凹凸がある。特にSK105は炭化物が一面に拡がっていた。SK106からは鉄釘が7点出土している。この二つの土坑はその形状や、多くの鉄釘が出土していることから火葬墓の可能性も考えられなくもない。土坑からは土師器や須恵器などが出土しているが、図化できたものはSK106から出土した土師器の小皿2点である。217・218は底部に糸切り痕が残っている。内湾して立ち上がる口縁部は尖り気味に取め、回転ナデで仕上げている。

これらの土坑は、その出土遺物から、鎌倉時代前半頃のものと考えられる。各土坑の規模については表4のとおりである。

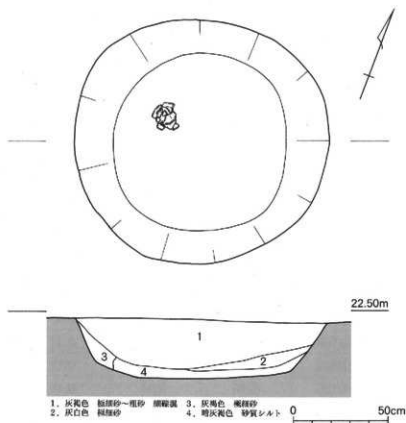


fig. 40 SK101 平面・断面図



fig. 41 SK101 出土遺物

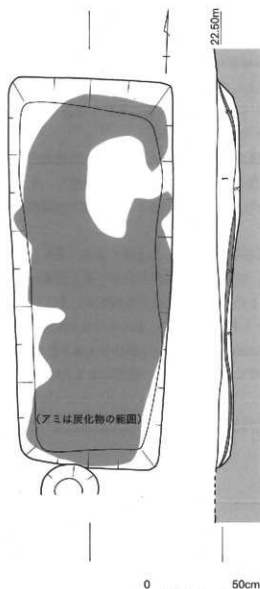


fig. 42 SK105 平面・断面図

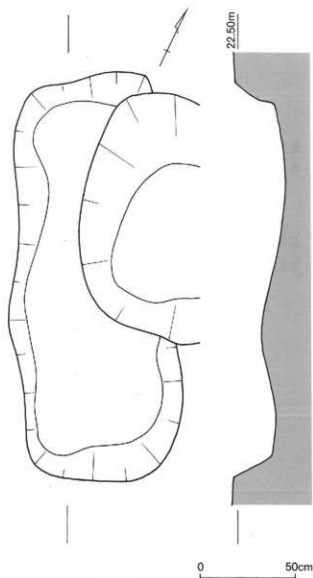


fig. 43 SK106 平面・断面図



fig. 44 SK106 出土遺物

土 坑	長経 (m)	短経 (m)	深さ (m)	形 状
SK101	1.35	—	0.32	円 形
SK102	1.22	0.55	0.46	楕 円
SK103	1.32	1.04	0.37	楕 円
SK104	1.88	(0.94)	0.13	隅丸方形
SK105	2.05	0.84	0.12	ほぼ円形
SK106	1.92	0.85	0.23	ほぼ円形

表4 第1遺構面土坑法量表

() 内は残存値

(3) 溝

SD101

調査区西端部で東西方向の溝を1条検出した。検出した長さは5.3m、幅0.49m、深さ0.28mで、埋土は極細砂層である。出土遺物には土師器・須恵器がある。その内、図化できた遺物は須恵器坏蓋(219・220)と坏身(221)である。

219・220は天井部と口縁部界の稜がほとんど認められず、天井部は回転ヘラケズリを施す。口縁端部はやや外反して、丸く収める。221は短く内傾する口縁部を持ち、口縁端部は丸く収める。これらの遺物から、この溝の時期は古墳時代後期末頃と考えられる。

(4) ビット

非常に多くのビットを検出した。ビットの中には建物としてのまともにはならないが、柱穴底に礎盤を据えているものが含まれている。その中で、SP1219は20～30cm大の二つの平らな石を並べており、意図的に赤と白の石を一つずつ据えているようである。

222～233はビットから出土した遺物である。222は須恵器の坏蓋で、カエリを持つ。223は坏身である。224は須恵器の坏身で、古墳時代後期末から飛鳥時代頃のものであろう。

225は土師器の皿で、口縁端部内面に沈線状の段を持つ。226は圈脚門面硯で、脚部をほとんど欠損しており、全容は不明である。脚部に十字形のスカシが入る。復元口径

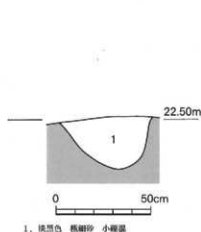


fig. 45 SD101 断面図

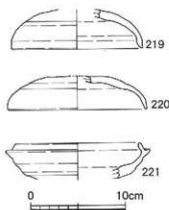


fig. 46 SD101 出土遺物

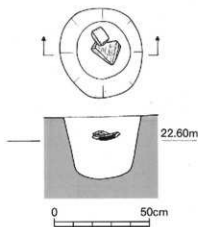


fig. 47 SP1087 平面・立面図

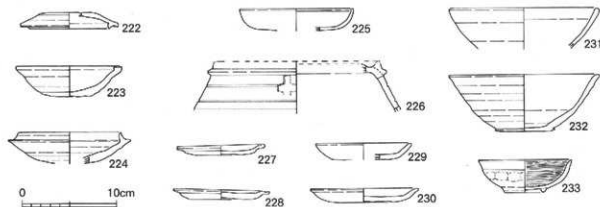


fig. 48 ビット出土遺物

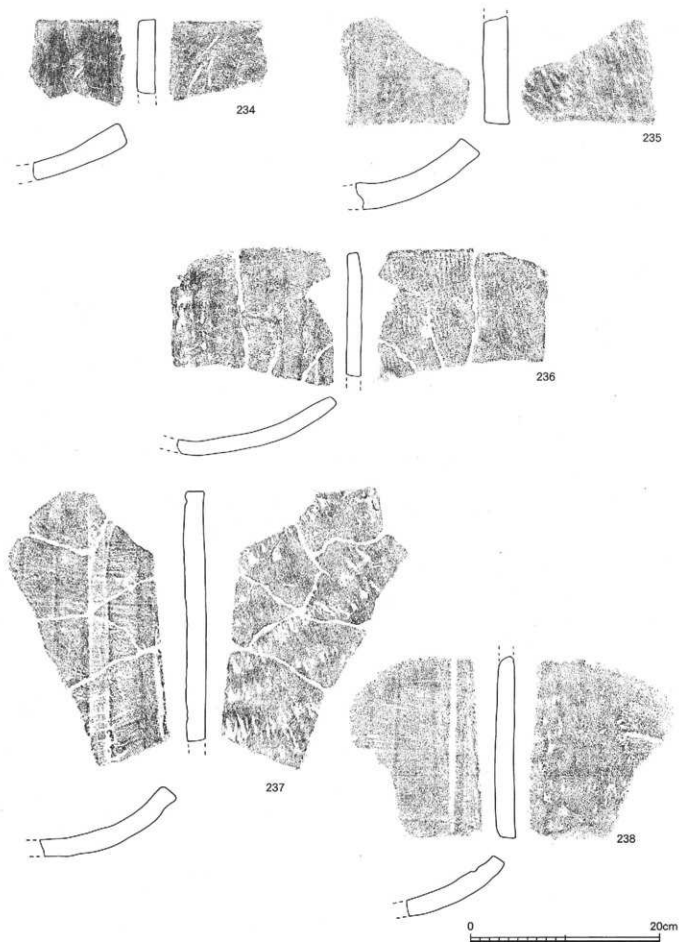


fig. 49 ビット・遺物包含層出土瓦 (234 : SP1198, 235・236 : SP1087, 237 : 遺物包含層, 238 : SP1071)

17.2cmで、奈良時代後半のものと考えられる。

227～233は平安時代末～鎌倉時代前半頃の遺物である。227・228は「ての字状口縁」を持つ土師器の小皿である。底部から短く立ち上がり、口縁部は外反して端部を摘み上げている。229・230は土師器の小皿で、平らな底部から短く立ち上がり、口縁端部を丸く収める。231・232は須恵器の甕で、232の底部は糸切り痕が残る。233は瓦器甕である。底部から手づくねで立ち上がる体部外面には指頭圧痕が残る。口縁端部は尖り気味に収め、回転ナデを施す。体部内面は横方向の細いヘラミガキを施し、見込みの部分には放射状のヘラミガキを入れている。底部の高台は低い。

瓦

234～238は瓦である。234～236・238はビットから出土している。出土した瓦は全て平瓦で、瓦当は出土していない。凹面は布目で、凸面は粗い縄目叩き仕上げである。234は凹面を粗くヘラケズリしている。235・236はSP1087から出土しており、深さ0.34mのビットの上層から出土している。図化し得ていないが、凸面に格子状の叩きを施すものもある。側面はヘラケズリされている。最も厚みのあるものでは、3cmの厚さのある瓦が出土している。

(5) 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物として、第1遺構面の遺物包含層や遺構検出時に出土した遺物がある。図化したものは須恵器(239～247)・土師器(248・249)・土鉢(250)・フイゴ羽口(251・252)である。

239は須恵器の坏蓋で天井部の回転ヘラケズリの範囲は狭くなっている。240～243は須恵器の坏身で、241・242の口縁部のたちあがりは短い。243は口縁部を外反気味に仕立てている。これらは古墳時代後半～飛鳥時代の遺物である。

244は須恵器の坏蓋で扁平な宝珠つまみが付く。口縁部は折り曲げて仕立てている。245～247は須恵器の坏身で輪高台が付く。

248・249は土師器の坏である。底部から外反して立ち上がる体部が口縁端部で外方に

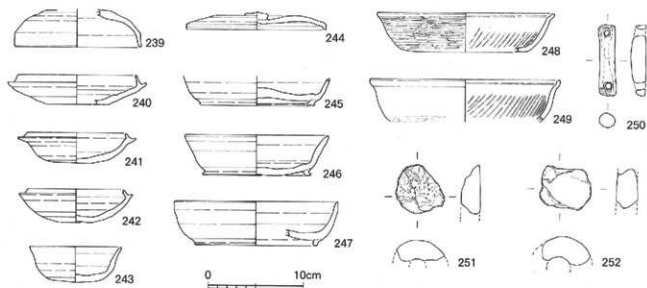


fig. 50 遺物包含層出土遺物

開き、端部内面に沈線状の段を持つ。体部外面はヘラケズリを施し、内面には細かい暗文が施されている。飛鳥時代～奈良時代前半頃のものと考えられる。

250 は土師質の棒状有孔土錘である。

(6) 鉄製品

253～265 は鉄製品である。253・259 は SK102、254・258 は SK103、255～257・260～263 は SK106、264 は SP1196、265 は遺物包含層から出土している。

253～257 は鉄釘の頭端部を薄く打ち延ばし、基部側に端部を折り曲げている頭巻釘である。258・259・262・263 は鉄釘の先端部である。断面の形状は正方形のものと長方形のものがある。265 は板状の鉄製品であるが、全体の形状は不明である。

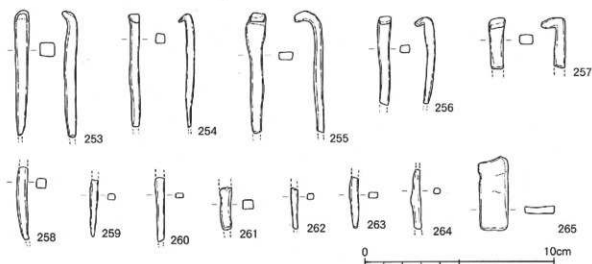


fig. 51 鉄製品

遺物番号	頭部形式	長さ (cm)	頭部幅 (cm)	厚さ (cm)	出土地
253	頭巻釘	6.6	0.8	0.7	SK102
254	頭巻釘	6.0	0.6	0.5	SK103
255	頭巻釘	6.5	1.5	0.7	SK106
256	頭巻釘	4.7	0.7	0.4	SK106
257	頭巻釘	2.7	0.8	0.5	SK106
258	—	3.8	—	0.5	SK103
259	—	3.0	—	0.4	SK102
260	—	3.4	—	0.5	SK106
261	—	2.2	—	0.6	SK106
262	—	2.2	—	0.3	SK106
263	—	2.8	—	0.5	SK106
264	—	3.2	—	0.3	SP1196
265	—	3.9	幅1.6	0.4	淡茶褐色極細砂

表5 鉄製品法量表

第3章 まとめ

月若遺跡第83地点の調査では、4面の遺構面が確認された。第4面では縄文時代中期末・晩期、第3面では弥生時代中期頃、第2面では弥生時代後期後半から末、第1面では古墳時代後期から飛鳥・奈良時代、平安時代末～鎌倉時代前半頃の各時期の遺構や遺物を確認できた。ここでは、周辺の調査成果も踏まえながら時代ごとの集落の変遷をまとめてみたい。

縄文時代の遺構では河道を確認した。今回の調査においては河道からの遺物の出土はなかったが、これまでの調査から縄文晩期以前の河道で、弥生時代中期には埋没していると考えられる。河道は北から南方向に流れるもので、芦屋川から派生するものであろう。埋土はシルト層と砂礫層からなっており、時代を経るに従い徐々に埋没していったものと考えられる。

また、遺構は確認していないが、東側に隣接する月若遺跡第81地点や北側の第2地点の調査に引き続き、縄文時代中期末に遡る遺物も出土しており、中期末の集落が月若遺跡の中心域である芦屋川の自然堤防上に存在すると推定できる。

弥生時代中期と考えられる第3遺構面では、遺物の出土する遺構は確認できなかった。第81地点や西側の寺田遺跡第139地点の調査でもこの時期の遺構の密度は低く、集落の縁辺部にあたると考えられる。

弥生時代後期後半から末頃では、多くの遺構や遺物が確認でき、月若遺跡における集落域の拡大が顕著となるものと考えられる。中でも、竪穴住居（SB201）と、大量の弥生土器を投棄していた溝（SD203）などのあり方を見れば、今回の調査地点付近は、数棟の竪穴住居で構成される集落の中心部分にあたる可能性が高い。東側の第81地点の調査でも「集落の居住域を画する溝」と考えられているSD203からは大量の弥生土器が出土し、この溝から7～8m西にSB201が位置している。まさに、溝に挟まれた、あるいは溝で画した微高地に住居が点在する様子が窺い知れる。SD203と第81地点のSD203から出土した弥生土器の中には、同一人物が製作したものと思えるほどよく似た土器も存在している。

一方、SD202から出土した土器は、その個体数からすれば、大量の土器を出土したSD203とは比較にならず、その出土状況は、SD203の土器が投棄されたものと推定されるのに対して、据えられた状況で出土している。器種についても、SD203から出土した土器が、日常雑器的なものが大半を占めているのに対して、SD202からは壺の出土の比率が高い。しかも、その中には頸部に竹管文を施すものや、記号のあるものが含まれている。こうした状況から、非日常的な要素が強いものである。

古墳時代後期から奈良時代にかけては、3棟の掘立柱建物で確認されている。周辺の調査でも同時期の掘立柱建物が確認されており、柱穴の規模や建物主軸方向においてこれらは共通する点が見受けられる。一連の集落を構成するものであろう。また、西側の寺田遺跡第139地点の調査では、古墳時代後期末の造り付けのカマドを有する竪穴住居が2棟確認されているが、今回の調査地点では検出されていない。

月若遺跡第 81 地点や寺田遺跡第 181 地点の調査において、芦屋廃寺の関連施設の存在が想定される瓦が出土しており、今回の調査においても瓦の破片は多く出土している。ただし、瓦当部分が出土しておらず詳細は不明である。また、この時期の出土遺物の中には陶脚円面硯があることから、掘立柱建物群は芦屋廃寺の関連施設か官衙的性格を有する建物と推定される。

平安時代末～鎌倉時代の時期においては、鎌倉時代前半頃の掘立柱建物が 1 棟確認されている。この時期には周辺でも多くの掘立柱建物が見つかっており、集落域の拡大が明白である。

隣接する西側の寺田遺跡第 139 地点ではこの時期の掘立柱建物が 6 棟確認されているが、今回の調査地点西半部には掘立柱建物の存在しない空間がある。一方、東半部で確認された SB104 と、この東側の第 81 地点や第 70 地点では掘立柱建物が合計 6 棟確認されている。集落内での建物群としてのまとまりを看取でき、当該期の土地利用の状況を示唆するものである。

以上のように、今回の調査は周辺の調査成果を追認するものである。そして、これまでの調査成果の蓄積は、より一層、過去の人々の「くらし」をまざまざと私たちに迫力を持って語りかけてくれるのである。



挿図写真 8 整理作業

カラー写真図版



SD203 出土遺物



第2遺構面全景（東南から）



S8201（西南から）



SB201・SD203 (西南から)



SD202 出土遺物



SD203 (北東から)





第4遺構面（東半部）全景（西から）



SR401（北から）



第3遺構面全景（東南から）



第3遺構面全景（西から）



第2遺構面全景（北東から）



第2遺構面全景（東南から）



第2遺構面全景（西から）



第2遺構面全景（西南から）



第2遺構面全景（西から）



第2遺構面 クレーン撮影（西から）



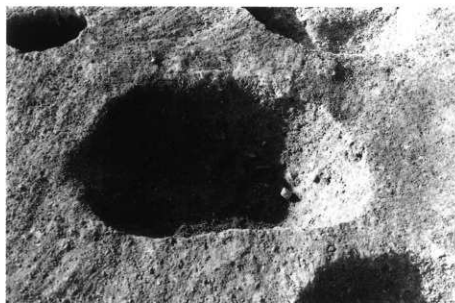
第2遺構面 クレーン撮影（西南から）



第2遺構面（北東部）全景（西南から）



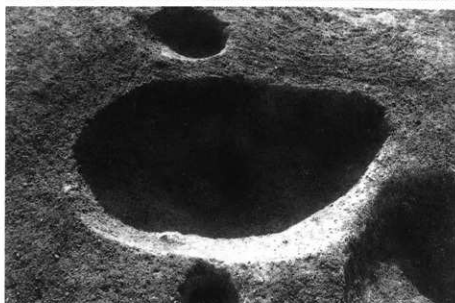
SB201（西南から）



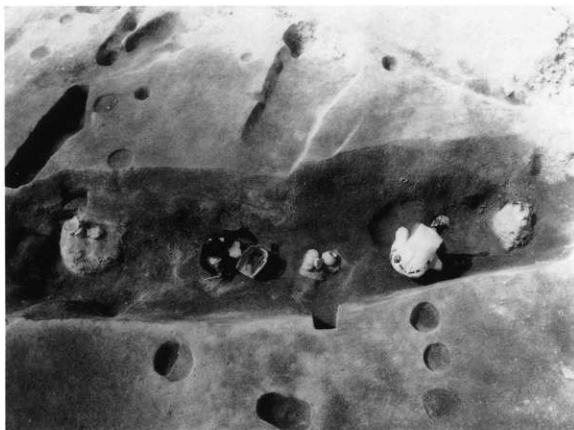
SK202 (南から)



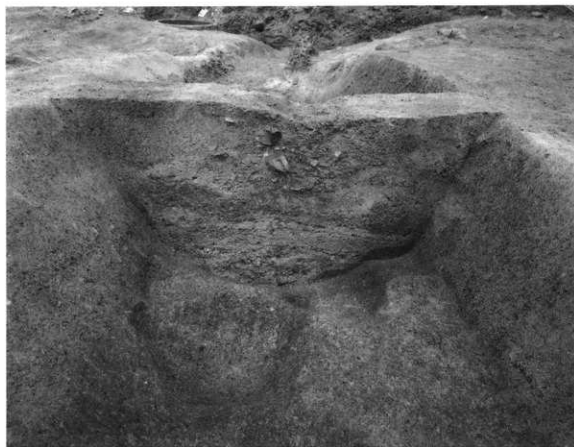
SK203 (南から)



SK204 (東から)



SD202 (北東から)



SD202 土層断面 (南から)



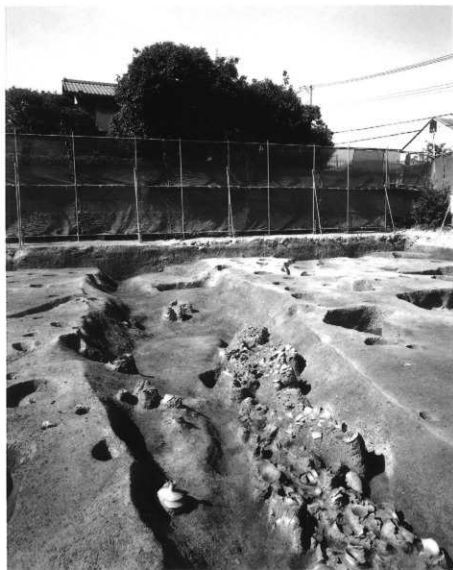
SD202 遺物出土状況
土器 26・28



SD202 遺物出土状況
土器 27・29



SD202 遺物出土状況
土器 41・42・44



SD203 遺物出土状況（南から）



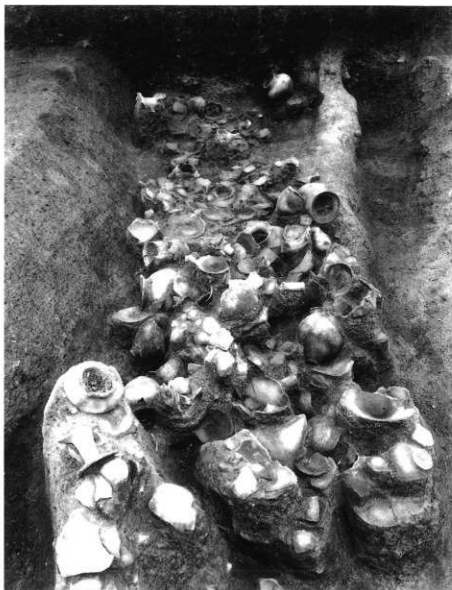
SD203 遺物出土状況（北西から）



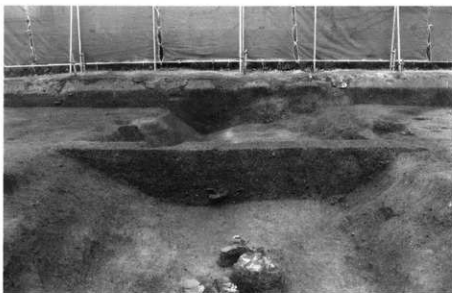
SD203 遺物出土状況 (1)



SD203 遺物出土状況 (2)



SD203 遺物出土状況 (3)



SD203 土層断面 (上層) (南から)



第1遺構面全景（東南から）



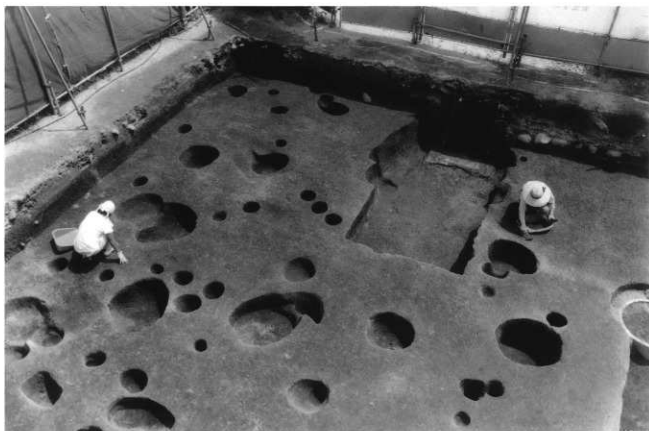
第1遺構面全景（北西から）



第1遺構面 クレーン撮影（北西から）



第1遺構面 クレーン撮影（西から）



SB101 (西から)



SK101 (南から)

SK105
炭化物出土状況（東から）



SP1038（南から）



SP1087（西南から）





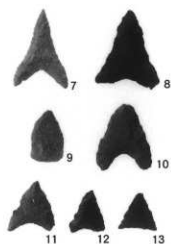
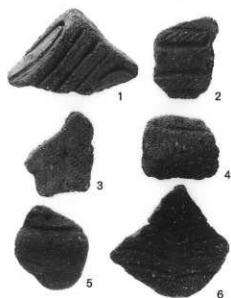
SP1219 (北から)



南壁土層断面

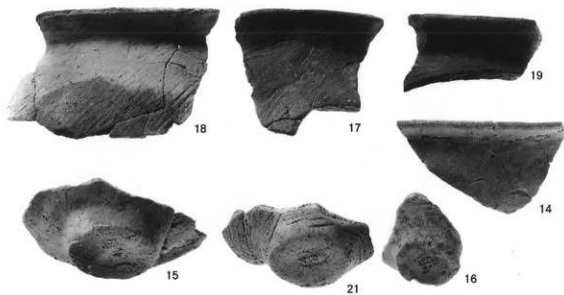


東壁土層断面



縄文土器

石鏃



SB201 出土遺物



22



23



24



25

SD201 出土遺物



26



27



34



30

SD202 出土遺物 (1)



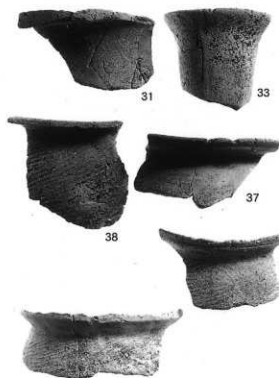
28



29



32



35



39



40



44



41



45



42



46



43



47



48



49



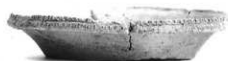
50



52



51



57



53



54



58



55



59



56



60



61



62



63



64



66



67



68



73



69



74



77



76



78



79



81



80



83



82



84



70



87



85



88



86



89



90



92



91



93



101



102



94



96



95



97



112



110



98



100



99



104



103



105



71



75



107



106



108



109



115



117



116

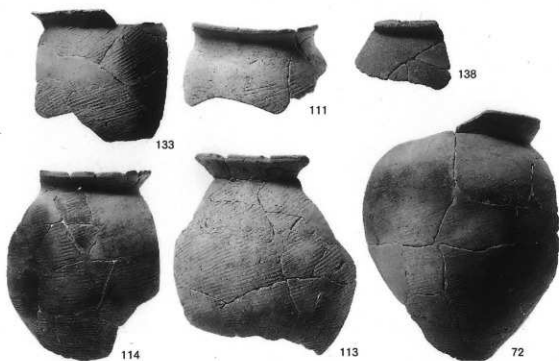


118



122

SD203 出土遺物 (11)





121



125



124



126



131



123



128



127



130



129



132



134



136



135



137



139



140



145



148



147



143



144



146



149



150



151



152



155



153



156



154



157



160



158



162



159



163



164



161



165



166



168



167



170



171



169



173



174



172



175



177



178



176



179



180



184



181



185



182



183



186



187



188



189



190



191



192



193



194



198



195



199



196



197



200



201



202



204



203

SD203 出土遺物 (24)



205



206



207



209



208

SD204 出土遺物



210

SB101 出土遺物



219



213

SB104 出土遺物



220



216

SK101 出土遺物



221

SD101 出土遺物



217

SK106 出土遺物



218



223



227



233

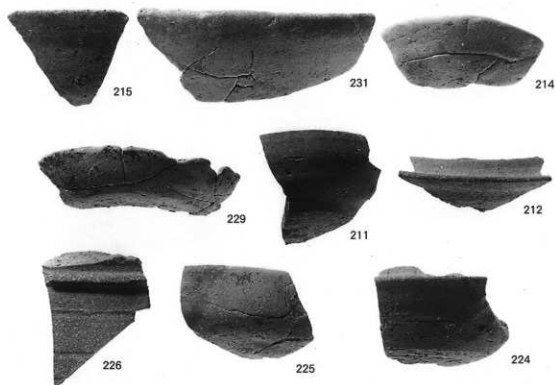
ピット出土遺物 (1)



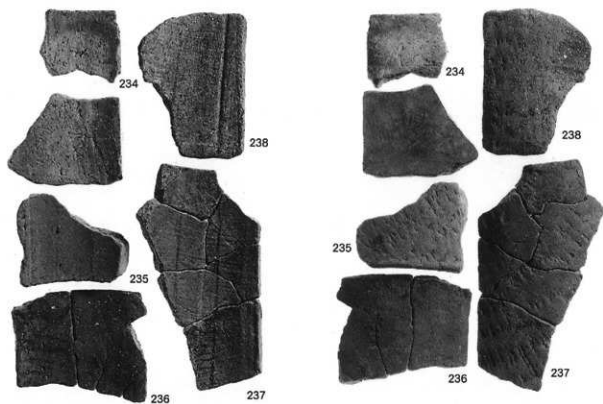
228



230



ビット出土遺物 (2)



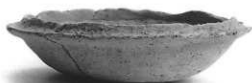
第1遺構面出土瓦



239



244



241



246



243



245



249



240



248



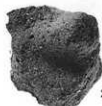
242



250



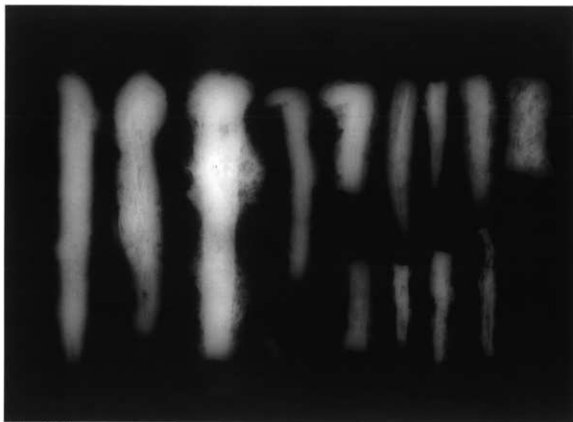
251



252



鉄製品



同上X線写真

報 告 書 抄 録

ふりがな	つきわかいせきはつくつちょうさほうこくしょ だい83 ちてん							
書 名	月若遺跡発掘調査報告書 第83 地点							
副 書 名	都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査VI							
巻 次								
シリーズ名	芦屋市文化財調査報告							
シリーズ番号	第 68 集							
編 著 者 名	斎木 巖							
編 集 機 関	神戸市教育委員会							
所 在 地	〒 650 - 8570 兵庫県神戸市中央区加納町 6 丁目 5 番 1 号 TEL 078 - 322 - 6480							
発行年月日	西暦 2007 年 3 月 31 日							
所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		緯度・経度		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
つぎわかいせきは 月若遺跡 第83 地点	ひょうごけんあしやし 兵庫県芦屋市 にしあしやちよう 西芦屋町 5 番 - 20	28206		34 度 44 分 02 秒	135 度 17 分 58 秒	20050530 ～ 20051110	630 m ²	都市計画 道路山手 幹線街路 事業
	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
	集落跡	縄文時代～ 鎌倉時代		竪穴住居 掘立柱建物 土坑・溝・ピット		縄文土器・弥生土 器・土師器・須恵 器・瓦・鉄製品		遺構面を 4 面検出

芦屋市文化財調査報告 第 68 集

月若遺跡発掘調査報告書
第 83 地点

—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査VI—

2007.3.31

- 編 著 神戸市教育委員会
神戸市中央区加納町 6 丁目 5 番 1 号
TEL 078-322-6480
- 発 行 芦屋市教育委員会
芦屋市精道町 7 番 6 号
TEL 0797-31-9066
- 印 刷 株式会社 旭成社
神戸市中央区琴ノ緒町 1 丁目 5 番 9 号
TEL 078-222-5800
-

20